

日本オリエント学会だより

- 1) 第50回大会    2) 学会奨励賞    3) 作文コンクール    4) 新入会員    5) 会員消息

1) 第50回大会

期日：2008年（平成20年）11月1日（土）～2日（日）

会場：筑波大学 春日キャンパス講堂

担当：第50回大会実行委員会

委員長：常木 晃

委員：山田重郎、三宅裕、小松香織、池田潤

第1日 11月1日（土）

14：00～ 公開講演会

17：00～ 奨励賞授与式

18：00～ 懇親会

第2日 11月2日（日）

10：00～ 研究発表

参加者 221名

プログラム

第1日 公開講演会 筑波大学 春日キャンパス講堂

14：00～ 中近東文化センター学術局長・筑波大学名誉教授 池田 裕

「風と旅と旧約聖書」

15：30～ 筑波大学名誉教授 和田 廣

「ビザンツ世界における二大潮流—ギリシヤ正教的禁欲主義とビザンツ的世俗主義—」

第2日 研究発表 5部会

筑波大学 春日キャンパス7A棟 101～105 講義室

## 研究発表者・題目

### 第1会場

1. 長谷川敦章 北レヴァントにおけるミケーネ土器—テル・エル・ケルク 1号丘出土資料を中心に
2. 小野塚拓造 テル・レヘシュ出土のいわゆる「献酒台」(libation table)について
3. 小高 敬寛 西アジア新石器時代における暗所磨研土器の地域性
4. 前田 修 石器のマテリアリティー黒曜石の意味と役割について
5. 門脇 誠二 南レヴァント地方における初期農耕村落の社会と世帯の変化—ジクラブ溪谷の研究事例
6. 西秋 良宏 シリア、テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡の巨大女性土偶と新石器時代の儀礼
7. 小泉龍人・齋藤正憲 古代オリエントの土器製作復原—土器焼成窯の構築と彩文土器の焼成実験
8. 山藤 正敏 前期青銅器時代のパレスティナ地域における地域性—土器生産・流通体制の変遷について
9. 藤井 純夫 ビシュリ山系北麓のケルン墓調査
10. 金原 保夫 トラキア古墳の石室構造について

### 第2会場

1. 大久保五月 シュメール語王讃歌の考察
2. 川崎 康司 エシュヌナナのナラム・シン
3. 中山 八歩 ハンムラビの占領地行政
4. 山田 雅道 Araziqa 考—中アッシリア対ヒッタイト
5. 足立 拓朗 古代西アジア青銅製腕輪の編年と流通
6. 津本 英利 ウラルトゥの長剣について
7. 平敷 イネ ヒッタイト王への脅威—歴史的背景の考察
8. 竹内 茂夫 聖書ヘブライ語における「笛」の積義的考察
9. 長谷川修一 イエフ革命の史実性

### 第3会場

1. 花坂 哲 古代エジプトの民間信仰—アコリス遺跡出土の土製品から
2. 高宮いづみ エジプト先王朝時代のヒエラコンポリスにおける石器製作のバリエーション
3. 馬場 匡浩 古代エジプトにおける土器生産の専門化
4. 河合 望 トウトアンクアメン王によるカルナク、アメン大神殿の復興について
5. 和田浩一郎 古代エジプト・新王国時代の私人墓における性差表現
6. 田澤 恵子 Innovation or re-import?—古代エジプト新王国時代におけるシリア・パレスチナ起源の神々に関する図像学的—考察
7. 坂本 麻紀 ナパタ時代のクシュ王国の埋葬に関する—考察
8. 近藤 二郎 古代エジプト固有の星座の同定について
9. 柳生 俊樹 パジリク墓群の年代

### 第4会場

1. 岡田 真弓 イスラエルにおけるキリスト教会堂遺跡の保存と公開に関する研究
2. 江添 誠 奉獻銘文にみるキリスト教会堂建設活動—トランス・ヨルダン地域を事例として
3. 土谷 遥子 ダレル溪谷最奥のチレリ峠に至るヘンベリ川河口からの行程—パキスタン北部地方『法頭の道』現地調査 2007
4. 嶋田 英晴 中世イエメンのユダヤ教徒
5. 徳原 靖浩 ナーセル・ホスロウ『宗教の顔』におけるザーヒルパーティーンの構造

- 6. 倉澤 理 アシュアリー派神学における「思弁すること」の根拠づけに関する問題
- 7. 矢口 直英 大衆化としての預言者の医学
- 8. 林 則仁 『被創造物の驚異』（カズウィーニー著）の挿絵
- 9. 蓼沼理絵子 19世紀後半 - 20世紀初頭エジプトにおける血の中傷
- 10. 佐野 東生 『カーヴェ』紙とイラン・ナショナリズムの展開

## 第5会場

- 1. 森山 央朗 地域の由緒と美質の語り方—地方史地誌部分の内容・形式・意味
- 2. 中村 妙子 初期十字軍時代におけるシリアの小都市
- 3. 西村 淳一 『メルヴ史』解題—12世紀以前のものを中心に
- 4. 吉村 武典 マムルーク朝時代のナイル地理書
- 5. 山下 真吾 15世紀初頭のオスマン朝における歴史観—アフメディーの『イスケンデル・ナーメ』を中心として
- 6. 秋葉 淳 タンズィマート改革初期におけるオスマン帝国の政策決定過程
- 7. 小松 香織 海運史料にみる近代オスマン社会の変容
- 8. 上野雅由樹 19世紀イスタンブルにおけるアルメニア文字のトルコ語定期刊行物
- 9. 山口 昭彦 後期サファヴィー朝とクルド系諸侯
- 10. 勝沼 聡 イギリス占領下エジプトにおける刑事政策の展開

## ポスターセッション

- 1. 榮谷 温子 口語アラビア語で書かれた新聞記事
- 2. 村井 伸彰 UET7, 62, 68に見られるアクル(AK-LU<sub>4</sub>)について
- 3. 常木晃・西山伸一・長谷川敦章  
北西シリア、テル・エル・ケルク1号丘の発掘調査
- 4. 平敷 イネ 3Dモデリング応用一例
- 5. 小高 敬寛 シリア、テル・アイン・エル・ケルク遺跡東トレンチの調査
- 6. 坂本 麻紀 スーダン—クシュ王国の遺産
- 7. 長谷川敦章・木内智康  
シリア、ビシュリ山系、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の発掘調査
- 8. 西秋良宏・門脇誠二・久米正吾  
ユーフラテス川中流域の先史遺跡
- 9. 花坂 哲 アコリス遺跡工房域発掘調査
- 10. 早稲田大学エジプト学研究所（所長・近藤二郎）  
エジプト、アブ・シール南遺跡の調査
- 11. 早稲田大学エジプト学研究所（所長・近藤二郎）  
エジプト、ダハシュール北遺跡の調査
- 12. 早稲田大学エジプト学研究所（所長・近藤二郎）  
ルクソール西岸岩窟墓第47号墓の再調査
- 13. 早稲田大学エジプト学研究所（所長・近藤二郎）  
王家の谷・西谷、アメンヘテプ3世墓の調査と修復
- 14. 早稲田大学エジプト学研究所（所長・近藤二郎）  
クフ王の第2の船プロジェクト

## 研究発表要旨

(以下の要旨は、大会後に発表者に改めて執筆を依頼したものであり、大会で配布された要旨集に掲載されたものとは異なる場合があります。)

### 第1会場

#### 1. 北レヴァントにおけるミケーネ土器 -テル・エル・ケルク1号丘出土資料を中心に

長谷川敦章

後期青銅器時代において、ミケーネ土器はエジプトから、レヴァント、キプロス、エーゲ海域と汎東地中海世界に分布している。ミケーネ土器の広い分布域は、該期において東地中海を舞台とした大規模な交易活動があった傍証として理解されている。ウルブルン沖やゲリドニアブルヌ沖で確認されている沈船及びその積み荷からも、交易活動の一端を垣間みることができる。

北レヴァントでミケーネ土器が出土している遺跡は、そのほとんどが地中海沿岸沿い、もしくは海岸平野に立地している。そして後期青銅器時代の北レヴァントは、こうした地中海沿岸の遺跡に焦点があてられ、東地中海世界の枠組みでとらえられ、位置づけされることが多かった。

一方で、北レヴァントのオロンテス川以東、つまり内陸地域におけるミケーネ土器の出土は極めて限られている。また、北レヴァントの内陸地域は地中海沿岸地域や北メソポタミア地域に比すると、まだまだ資料の蓄積が充分であるとは言い難い。

このような北レヴァント内陸地域の現状を踏まえ、2007年度よりシリア考古博物館総局(団長:ジャマル・ハイダール)と筑波大学シリア考古学調査団(団長:常木晃)との合同で、シリア・アラブ共和国イドリブ県において、テル・エル・ケルク(Tell el-Kerkh)1号丘遺跡の本調査が開始された。テル・エル・ケルク1号丘遺跡は、オロンテス川の東側にあるエル・ルージュ盆地内に位置し、テル・エル・ケルク遺跡を構成する三つの遺丘のうち最大規模を誇る。

2007年度の発掘調査では、鉄器時代から前期青銅器時代までの文化層を確認し、ミケーネ土器の器種の一つである鍔壺(Stirrup Jar)が出土した。北レヴァントでは、テル・アチャナ(Tell Achana)遺跡、ラス・シャムラ(Ras Shamra)遺跡、ミネト・エル・ベイダ(Minet el-Beida)遺跡、ラス・イブン・ハニ(Ras Ibn Hani)遺跡、テル・スーカス(Tell Sukas)遺跡で鍔壺(Stirrup Jar)の出土が報告されており、いずれの遺跡も地中海沿岸地域やオロンテス川流域に位置している。つまり当該資料は、オロンテス川以東ではじめて出土した鍔壺でありその資料的価値は高く、テル・ブラク(Tell Brak)遺跡など、ユーフラテス河流域、ハブール川流域にもたらされたミケーネ土器の搬入経路の解明、さらには東地中海の文化要素とシリア内陸部の関係性を考察する上で重要である。

テル・エル・ケルク1号丘遺跡の調査は現在継続中であり、今後の成果がおおいに期待される。

#### 2. テル・レヘシュ出土のいわゆる「献酒台(libation table)」について 小野塚拓造

本発表は、テル・レヘシュ遺跡の第2次調査(2007年3月)の際に出土した石製品を紹介し、その背景を考察するものである。焦点を当てた石製品は、幅55cmほどの玄武岩を加工したもので、平たい上面にすりばち状の窪みがあり、その周囲を取り囲むように、複数の小さなカップ状の窪みが配置されている。同じようなデザインの石製品は後期ミノア時代のクレタ島で見ることができ、それらは、一般的に献酒台(libation table)やケルノスなどと呼ばれ(発表では便宜的に「献酒台」とした)、祭祀遺物として捉えられている。南レヴァントでは、同様の「献酒台」が、テル・レヘシュ遺跡の他に、メギド遺跡、テル・キシヨン遺跡などで出土しているが、それに焦点を当てた研究は提出されていない。

テル・レヘシュ遺跡の「献酒台」は、後期青銅器時代Ⅱ期から鉄器時代初頭にかけてのオリーブ油の生産施設に伴って出土した。搾油施設は円形で、床は平たい切り石で舗装されている。この石敷きはわずかに傾斜し、その先に、果汁が溜まる石製容器が埋め込まれている。興味深いことに、メギド遺跡で出土した2例の「献酒台」も、同様のオリーブの搾油施設と共伴していて、このことは、出土状況が判明している「献酒台」のすべてが、オリーブ油の生産施設内で出土していることを意味する。そこで、「献酒台」はオリーブの実の破碎や圧搾に用いられていたと考える

ことができるが、青銅器時代や鉄器時代に見られるオリーブの圧搾床とは形体が異なるし、レヴァー式圧搾機の圧搾台であったとも考えにくい。また、後期青銅器時代や鉄器時代の南レヴァントでは、工場や作業場の一角に祭祀施設が設けられることがある。その場合、「献酒台」がオリーブ油生産施設内の「祭祀コーナー」で用いられた可能性を指摘できる。いずれにしても、「献酒台」の用途を直接的に示す証拠はなく、今のところは憶測の域にとどまるしかない。しかし、後期青銅器時代から鉄器時代初頭にかけての南レヴァントで、今までになかった構造の搾油施設を特徴とするオリーブ産業が台頭し、そこで、エーゲ海地域に特徴的なデザインの花石製品が使用されていたことは興味深い。

### 3. 西アジア新石器時代における暗色磨研土器の地域性

小高 敬寛

西アジアの新石器時代研究における暗色磨研土器 *Dark-faced Burnished Ware* という用語は、1960年にブレイドウッドらがアムーク平原の調査報告を刊行すると広く定着した。以来、アムーク平原の資料は長年にわたって暗色磨研土器の示準とされてきたが、これには反面、新たなまとまった資料が乏しいという事情もあった。暗色磨研土器なる言葉は、単に器面が暗色でミガキ調整された土器という意味ではなく、一定の時空間的範囲に特有な一群の土器を示す固有名詞である。だが、示準となる標本が限られていたことから、断片的な資料を安易に暗色磨研土器として同定する傾向があり、その示す範囲は研究者間で混乱が生じてしまっている。

しかし、1990～1992年に実施されたルージュ盆地の調査や、1992年に刊行されたラス・シャムラの報告書では、アムーク平原の暗色磨研土器に近似する資料が明らかにされた。これによって、暗色磨研土器の編年の枠組みが批判的に検証されはじめるとともに、その編年を適用しうる地域的な枠組みも検討できるようになった。さらに近年では、ルージュ盆地内のテル・アイン・エル＝ケルク、メルシン近郊のユムクテペ、ハマ近郊のシールといった諸遺跡が発掘され、資料の蓄積が進みつつある。

これまでに知られている暗色磨研土器の事例をみていくと、アムーク平原（テル・アル＝ジュダイダ、テル・ダハブ）やルージュ盆地（テル・エル＝ケルク 2、テル・アイン・エル＝ケルク、テル・アレイ 1、テル・アレイ 2、テル・アブド・エル＝アジズ）に類似した様相をもつと考えられる遺跡には、ラス・シャムラの他にテル・マストゥーマとクミナスがあげられる。これらの遺跡は、トルコのアンタクヤとシリアのラタキアおよびイドリブの3点を囲んだ範囲、あるいはその近傍に集中している。

ただし、その限られた範囲を離れると、暗色磨研土器の変遷過程や土器アセンブリに占める位置は大きく異なっている。したがって、暗色磨研土器の名で呼ばれている土器には明らかな地域差があり、必ずしもすべてがアムーク平原やルージュ盆地の事例を示準にすべき類例とはいえない。暗色磨研土器という用語の扱いには然るべき注意を払わなければならないし、その定義や系譜関係、出自等の再考が望まれる。

### 4. 石器のマテリアリティ—黒曜石の意味と役割について

前田 修

現象学的アプローチに基づいたマテリアリティの概念を用いるならば、すべての物質の存在は、人間が意味を与えて解釈することによって初めて認識されるものであり、したがって物質の意味や役割は、その存在が人々によってどのように解釈されるかによって異なるものだということができる。そのため過去の物質文化の研究にあたっては、過去の人々が当時の物質をどのような意味をもった存在として捉えたのかを考える必要がある。ところが物質の意味は、常に人間の自由な意志によって主体的に与えられるものではなく、人々が物質と関わる中で、その社会的コンテクストに応じて認識されるものである。したがって考古学者が過去の物質文化を理解するためには、過去の人々がどのように物質と関わったのかに目を向けることで、過去の人々にとっての物質の意味を解釈しなければならない。また、このように「意味を持った存在」としての物質は、人々が社会を理解する上で積極的な役割を果たすものである。物質存在と同様に、社会の存在もまた、人々が社会と関わる状況に応じて解釈されることではじめて認識されるものである。そのため、そのような状況を構成する大きな要素である物質文化は、人間が社会を認識する際の物的媒体としての役割を持つのである。

このような視点に立つと、北西シリアのテル・エル・ケルク遺跡、ユーフラテス河中流域のアカルチャイ・テペ遺

跡において利用された黒曜石は、固有の意味と役割を持った物質であったと考えることができる。楔形石核を用いた石刃製作に用いられた黒曜石や、黒曜石製の尖頭器、サイド・ブロー＝ブレイド・フレイクと呼ばれる石器はどれも、その交易相手との共通性を体現する物質であった。そして同時に、そのような黒曜石を日常的に利用することで、交易相手との関係が繰り返し認識されたのだといえる。黒曜石は単なる石器素材ではなく、集落間の社会関係が埋め込まれた、文化的意味を持った存在として人々に理解され、そのような黒曜石の利用によって社会関係が再生産されたのである。

## 5. 南レヴァント地方における初期農耕村落の社会と世帯の変化—ジクラブ溪谷の研究事例

門脇 誠二

西アジアにおける農耕牧畜の起源に関して、社会面に注目した研究が近年増加した。例えば、遺跡規模や建築物、埋葬儀礼の変化に基づいて、先土器新石器時代B期（PPNB）に集落が拡大し、社会が複雑化した傾向が指摘された。しかし、初期農耕社会は一線的に発展し、後の都市社会に到達したわけではないようだ。PPNB期から土器新石器時代（PN期）への移行期に、多くの大規模集落が縮小あるいは放棄されたからである。この現象は特に南レヴァントにおいて顕著で、PN期の始めには当地の人口が激減したと以前は考えられていた。

しかし、この地域で小型農村が散在する状況が近年明らかになってきた。特に北ヨルダンのジクラブ溪谷では、PN期農耕民の居住組織と地域共同体の様子を明らかにするため、散在する農村の比較研究が進められている（代表：トロント大学 E. B. Banning）。その一環として、本研究はジクラブ溪谷で営まれた初期農村の1つ、タバカト・アル＝ブーマ遺跡における3つの建築期を対象に集落構造を分析した。建築物の空間構造と、遺跡内における場の利用パターンを分析し、居住民が日々の活動を通してどのように社会交流を行い、それがどう変化したかを調べた。建築空間の分析として、スペース・シンタクスという定量的方法を用い、集落内の様々な空間のアクセス難易度を計測した。また、場の利用パターンを明らかにするため、遺跡形成過程を考慮しながら人工遺物と自然遺物の空間分布を調べた。

分析の結果、当遺跡では合計10の住居が発見されたが、1つの建築期には2～3つの世帯のみが居住したようだ。一方、世帯間の変化が考えられる。第3期では複数の世帯が屋外作業場を共有し、世帯間の協働関係が示唆されるが、後の第4期になると、新たな住居や屋外壁が設けられ、世帯空間が互いに隔絶する。それにしたがって、様々な日常活動が個別の世帯単位で行われるようになる。次の第5期には広い空き地が住居間に形成されるが、それは複数世帯の共有作業場として利用されなかったようだ。この様に、小規模村落でも居住民の関係は流動的であったと考えられる一方、同様な世帯関係の変化が、他のPN期集落においても指摘されている。今後の課題は、当時の居住組織の変化がなぜ起こり、それが後の銅器時代における生産の強化や交易の発達、社会の複雑化とどのような歴史的関係にあったのかを明らかにすることである。

## 6. シリア、テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡の巨大女性土偶と新石器時代の儀礼

西秋 良宏

女性土偶は西アジア新石器時代の儀礼用品を特徴づける遺物の一つである。遅くとも先土器新石器時代初めには出現しており、その後半に一般化したことが知られている。それらの土偶は概して小形であり、高さ5-6cm以下がほとんどである。ところが、2004年の夏、シリア東北部にあるテル・セクル・アル・アヘイマル遺跡で高さ14.5cmもある女性土偶が出土した。先土器新石器時代PPNB期の末、約9000年前の作品である。大形女性土偶はアナトリアのチャタル・ホユックやパレスチナのシャア・ハゴランなどで知られているが、いずれも土器新石器時代の焼成土偶であって本例（非焼成）より数百年も新しい。また、シリア・メソポタミアの新石器時代遺跡における大形女性土偶は初出である。この発表では本土偶の位置づけと儀礼研究にかかわる示唆について言及する。

本作品は巨大であるだけでなく、次のようにユニークな特徴も備えている。第一は圧倒的な造形である。頭部、胴部とも写實的に表現され、毛髪、入れ墨、衣服などをあらわすとみられる多彩色顔料の塗布がみとめられる。稀少鉱物をふくむ少なくとも三種の顔料が用いられている。髪、眉、目、鼻、口、耳など頭部表現は特に精細であり、本作品を中東先史美術の傑作の一つたらしめている。

第二は出土状態である。通常の土偶の多くが炉や灰層など火を用いた屋外施設で出土するのに対し、本例は漆喰張り床をもつ部屋の床下に埋納されていた。また頭部がはずれた状態で見つかった。これが意図的であるとすると、先土器新石器時代に広くおこなわれていた死者の二次葬あるいは床下埋葬を連想させる。

このような特質をテル・セクル・アル・アヘイマル遺跡、および関連遺跡から出土した他の多数の女性土偶と比較してみたところ、当該土偶の特殊性は際だっていることが判明した。新石器時代女性土偶は豊穡をつかさどる地母神と解釈されることが多いが、用心が必要である。民族誌調査で得られている知見を参考に比較対照してみると、これまで見つかった新石器時代女性土偶のほとんどは使用時間の限られるまじないの道具、あるいは願掛けの人形であったとみられる。それに対し、本例は長期にわたって使用された祈りの対象であったと推察された。先土器新石器時代に地母神信仰なるものが本当に存在したのだとすれば、この土偶こそが、その最古の、かつ具体的証拠としてふさわしい。

## 7. 古代オリエントの土器製作復原—土器焼成窯の構築と彩文土器の焼成実験

小泉龍人・齋藤正憲

発表者は、古代オリエントの工芸技術のなかで銅石器時代（ウバイド期～ウルク期）の土器製作技術に注目し、その進展がオリエントの都市化とどのように関係していたのかを追究してきた。とくにウバイド土器の彩文吸着に関して、窯構造と温度操作の関係が鍵となる見通しを得た。そこで、土器製作技術の推移から都市化を探っていく手がかりをつかむためにも、実験考古学的な見地に立って、土器焼成窯を構築してウバイド彩文土器を復原製作することにした。今回の発表では、築窯と焼成実験の予備的な成果を紹介した。

実験用の土器焼成窯を構築するために、埼玉県の早稲田大学本庄校地に用地を選定した。その際、同高等学院の齋藤正憲会員に協力を仰ぎ、昨年（2007年）11月中旬、計4名でほぼ半日かけて築窯作業を実施した。築窯にあたり、北シリアのテル・コサック・シャマリで発掘された昇焰式土器焼成窯（下部に燃焼室、上部に焼成室）をモデルとした。用地を円形に掘削して底を叩きしめて半地下式の燃焼室をつくり、耐火レンガと耐火モルタルを組み合わせ多角形プランで長軸（南北方向）約1mの小型土器焼成窯を構築した。半地下式の燃焼室の上端にはレンガを渡してロストル（火床）とし、直上に可動式の焼成室を設定した。

翌朝、別途製作しておいた14個体の復原土器（彩文・無文土器）などを窯詰めし、ナラ材を燃料として焼成実験を行った。着火から薪投入停止まで約2時間半、800℃以上が1時間以上続き、最高温度は900℃を超えた。窯出し後、ほとんどの個体は色落ちせず、彩文が器面に吸着していることを確認した。また本年10月初旬にも焼成実験（12個体）を行った。900℃以上が約1時間持続し、すべての個体は昨年より硬質な焼き上がりとなり、とくにマンガ系黒色顔料はほぼ吸着した。

今回の築窯・焼成実験により、彩文土器の焼成には窯で一定の温度と時間を維持する火力操作が鍵になる、という所見を得ることができた。まず窯構造について、燃焼室を半地下式にしてできるだけ広い空間を確保し、土器を詰めた焼成室は最小限にすることで、順調に昇温した。つぎに温度操作に関して、焼成室の温度を800℃以上で少なくとも1時間維持することにより、彩文の吸着が安定した。さらに焚口からの送風により、900℃以上を約1時間持続させることが可能となり、ウバイド彩文土器に近い硬質な焼き上がりとなった。

## 8. 前期青銅器時代パレスティナ地域における地域性—土器生産・流通体制の変遷について 山藤 正敏

本発表は、前期青銅器時代IB期からII期（前3300～2700年）にかけてのパレスティナ地域北部における諸遺跡・地域間の土器の地域差を抽出し、当該期における変動を地域的多様性の観点から示すことを目的とした。

分析にあたって、対象とした計12遺跡からの出土土器を9器形（鉢、大型鉢、皿、無頸壺、有頸壺、双把手付壺、細頸壺、注口付壺、小形壺）に大別し、これをさらに68器形に細分した上で、遺跡・地域を単位として細分器形の出現種類と大別器形の比率・数量の比較を行った。

まず、EBIB期においては、対象とした7遺跡から、全58種類の土器器形が認められた。遺跡の分布地域を3区

分（北西・西・東）した場合、全器形のうち 16 器形が特定の 1 ないし 2 地域にのみ認められることがわかった。また、大別器形の比率・数量について見ると、比率では東側と西側で鉢と無頸壺の比率に違いが認められたものの、いずれの遺跡においても無頸壺の数量が顕著であり、概して地域的な特色をうかがうことはできなかった。したがって、EB I B 期では、土器器形においては地域的な多様性が認められたが、出土器形の比率・数量では通地域的に均一な様相を捉える事ができた。

EB II 期にはいと、対象とした 8 遺跡からは全 49 種類の土器器形が確認できた。EB I B 期における遺跡分布地域の区分にプレー溪谷（北東部）を加えた場合、10 器形について、1 ないし 3 地域において特有であることがわかった。しかし、前時期に比べて特異な器形数が減少したばかりではなく、それらが通地域的に分布する傾向が増加していることもまた理解できた。一方、大別器形の比率・数量については、地域的な差異が見られるようになる。比率に関して、皿と有頸壺の比率の差異から、対象地域を東西に区分することが可能であった。また、出土数量を見ると、皿が有頸壺よりも多い地域（西側）と有頸壺が皿よりも多い地域（東側）に区分することができた。以上から、EB II 期においては、土器器形に均一性が認められるようになるのに対して、その出土比率・数量に地域差が認められるようになっていることが明らかになった。

結論として、EB I B 期から EB II 期にかけて、質的に異なる地域性が認められた。すなわち、前者における器形ヴァリエーションの多様性（文化的地域性）と後者における出土器形比率の差異である。これは、EB II 期には生じたとされる都市化と関係する社会・経済的な変動を表わしていると考えられる。

## 9. ビシュリ山系北麓のケルン墓群について

藤井 純夫

シリア北東部に位置するビシュリ山（Jabal Bishri）の周辺は、メソポタミアの粘土板文書が「マルトゥ（Mar-tu）」あるいは「アムル（Amurru）」の本拠地と言及している地域である。それは、旧約聖書に言うアモリ人の原郷でもある。では、この地域の考古学的調査が盛んであったかという点、そうではない。というより、全くの低調であった。調査に値する遺跡自体が少ないと見なされてきたからである。しかし、筆者らの実施した分布・試掘調査によって、この地域には多数の青銅器時代ケルン墓があることが判明した。今回の発表は、これら一連の調査の中間報告である。現在調査中のヘダージェ 1 =ケルン墓群（Rujum Hedaja 1 Cairn Field）について紹介し、その考古学的意義を検討する。

### ヘダージェ 1 =ケルン墓群の調査

ヘダージェ 1 =ケルン墓群は、2007 年 5～6 月の分布調査で確認された 4 件のケルン墓群のうちの一つである。この遺跡は、ビシュリ山系北麓の寒村、ビル・ラフム村（Bir Rahum）の東約 5km にあるテーブル状石灰岩台地の上に位置している。台地南縁に沿って 10 基、北縁に沿って 4 基、計 14 基の大小ケルン墓が確認された。

分布調査に続いて実施した第一次の発掘調査（2008 年 3 月 3 日～同 20 日）では、遺跡西端に位置する 10 号ケルン墓（RHD-1/BC-10）を発掘した。その結果、このケルン墓が、1) 二重の周壁を伴うシスト型の埋葬施設であること、2) 複数の小遺構を伴う複合体を形成していること、3) 出土遺物から見て、紀元前 2 千年紀に位置づけられること、が判明した。

引き続き実施した第二次調査（2008 年 5 月 15 日～6 月 8 日）では、1～9 号ケルン墓をまとめて発掘した。このうち、9 号ケルン墓では特異な青銅製ピンが出土し、紀元前 2 千年の初頭に位置づけられた。また、計 10 基のケルン墓間の連続的変遷（いわゆる Sequence）も確認された。これによって、分布で確認された多数のケルン墓を相対的に位置づけることが可能になった。その結果、ビシュリ山系北麓に集中する多数のケルン墓が中期青銅器時代の初頭に位置づけられるとの展望を得ることができた。

### まとめ

ビシュリ山系における紀元前 2000 年前後の遊牧民墓ヘダージェ 1 =ケルン墓群は、メソポタミア粘土板文書の言う「マルトゥ/アムル」の墓である可能性が出てきた。事実、その周囲には類似のケルン墓数百基が密集し、この地域が青銅器時代大型遊牧集団の一大聖地・墓域であったことを示唆している。問題は盗掘墓が多いため、年代決定の証拠がまだ不足していることである。この点を、今後の調査によって補っていきたい。

## 10. トラキア古墳の石室構造について—マケドニア式石室墓を中心として 金原 保夫

ブルガリアを中心とするバルカン半島東北部には、古代騎馬民族トラキア人の建造した都城や神殿、墳墓が数多く残されている。近年、ブルガリアではこれらのトラキア遺跡の考古学的発掘調査などによって新発見が相次ぎ、日本をはじめ世界各地での展覧会を通じてトラキアの文化遺産への関心が高まっている。

トラキア人の墓制は初期にはクルガン（高塚）を伴う堅穴墓、ドルメン、摩崖墓も見られるが、前6世紀以降、墳丘墓が発達し、メゼク、カザンラク、シプカ、スヴェシュタリなどのように高度の建築技術や芸術性を備えた横穴式石室墓が造られた。

トラキア古墳の横穴式石室にはトロス式の穹窿墓と並んで、主室が方形で半円筒形の天井（バーレル・ヴォールト）をもつマケドニア式石室墓やオストルシャ古墳のように切妻屋根の霊廟型の石室も見られる。マケドニア式石室墓は、その名が示すように古代マケドニア王国を中心にして、その周辺地域に分布する。しかし、隣接地域に限らず、ブルガリアのスヴェシュタリ古墳のように、バルカン半島北東部のトラキア国家のゲタイ王国にも存在している。

発表者はこれまでに東海大学トラキア発掘調査団の一員としてゲャドヴォ遺跡の発掘調査に参加する一方、トラキア古墳の踏査や発掘見学を通じてブルガリアにおけるトラキア考古学の成果と課題について報告してきた。そこで本発表では、スヴェシュタリ古墳を含むズボリャノヴォ地方のマケドニア式石室墓を中心に、トラキアとマケドニア両古墳の石室構造を比較検討して構造的特徴を明らかにし、石室の起源について考察した。この結果、スヴェシュタリ古墳の装飾に見られるヘレニズム美術の影響が黒海沿岸のマケドニアと関係を持つギリシア植民市を通じてゲタイ王国に受容された可能性を指摘した。また、トラキア古墳に見られるファサードや石室の構成、引き戸式扉の存在などからトラキアの独自性を明らかにした。さらにマケドニアとトラキアにおけるアーチやヴォールト工法の導入に関しては、プラトンの記述や前4世紀半ばに属すマケドニア式石室墓、石室の拡大理由などからアレクサンドロス大王の東征に関連付ける説を批判した。

## 第2会場

### 1. シュメール語王讃歌の考察

大久保五月

本発表では、ウル第三王朝2代目の王シュルギの王讃歌を中心に、ウルナンム王讃歌、イシュメダガン王讃歌との比較を通して、新たなシュメール語王讃歌考察の糸口の提示を試みた。王讃歌考察の着目点として定めたのは、作品の随所に現れる神々の描写、特に王と神々が親子、兄弟、夫婦などの血縁・姻戚関係によって結ばれていることを明記している箇所である。このような表現は、基本的に主従関係で成立しているメソポタミアの神と王という概念からずれがあり、そこに何らかの書き手の意図が存在することは明らかであり、その意図を探ることには意義があると考えられる。

王と神々の血縁・姻戚関係を描いている場面をより厳密に調べると、大きく分けて2つのパターンが存在していることがわかる。1つは、王を「某神の子」と形容しているケース、そしてもう1つは神々を「王の母（・父・兄弟など）」と形容するケースである。ウルナンム、シュルギ、イシュメダガンの3王を讃える王讃歌を、上記で述べた点に着眼して比較すると、シュルギ王讃歌のみに見られる大きな特徴を確認できる。それは、2つのパターンのうち前者は、形式的に見ればどの王讃歌でも同じように存在しているのに対して、後者はシュルギ王讃歌だけに限定されているということである。この違いは一見瑣末な問題のようにも思えるが、シュルギ王讃歌が他の王讃歌と一線を画している点であることを強調したい。なぜなら、神々の側が王であるシュルギの血縁・姻戚であると明記される場面では、それらの神々は単なる形容句としてではなく、王を傍らで守護するために、それぞれ明確な役割を持ち作品の中で動き回る主体として描かれるのである。

また王讃歌で神々が登場する場合、通常は「偉大なる神々を讃え崇める」ことが王の功績となり、その結果王が神々から恩恵を受けるという図式が成り立っている。そのため、王讃歌と神讃歌の明確な区別は困難であると言える。しかし、「王の血縁・姻戚である某神」という表現は、神に焦点を当てながらも、王を高めることにより重点を置いていると考えられ、それゆえに、これが他の作品と区別する何らかの基準となりえるのではないかと考えられる。シュルギ王讃歌は、

作品としての完成度の高さに加えて、「王の讃美」を最も忠実に実行しているという点でも、やはりシュメール語王讃歌というジャンルの頂点に立っていると考えることができるだろう。

## 2. エシュヌンナ王権観におけるナラム・シン—「イバル・ピ・エル王朝」の戦略とその王権理念

川崎 康司

前 19 世紀後半にティグリス川の最南の支流ディヤラ川下流に位置する都市エシュヌンナに成立したイバル・ピ・エル王朝 [イバル・ピ・エル 1 世—イピク・アダド 2 世—ナラム・シン—ダドゥッシャーイバル・ピ・エル 2 世] は、それまでの守勢から一転して領土拡大政策に乗り出す。この間にエシュヌンナではイピク・アダド 2 世がアッカド王朝以来の伝統ある「全土の王」号を復活させ、自らの後継者にナラム・シンの名をつけた。ここに示されたエシュヌンナの新たな王権観は、アッカド王朝の権威と業績に由来するものであり、その戦略上の意義は、アッカド王の偉業再現を大義とした戦略の正統性を内外に印象づけようとしたものであることは明らかである。

報告者は、今回、「全土の王」イピク・アダド 2 世とその子ナラム・シンに焦点をあて、彼らの業績を再度整理し直し、かつ、サルゴンからナラム・シンにかけてのアッカド王朝のそれと比較することで、彼らがアッカド王朝の権威にこだわった理由や背景を考えてみた。結果、そこには、群雄割拠の覇権争いに参戦したエシュヌンナが、「ウル第三王朝の後継者」たる王権観を基本に、その正統性を主張し合う南部列強（イシン・ラルサ）に対峙するために、古バビロニア時代に高まってきたアッカド王の「英雄化」を利用したという理解とは別に、「ワルー地方（ディヤラ流域）の覇者」としての独自の意図があったと考えるにいたった。

宿敵であるエラムやアムルを相手にしながら、ディヤラ河口部からハンリン盆地までの「ワルー地方」に覇権を確立したイピク・アダド 2 世は、覇者たる権威をかつてこの地域からエラム勢力を駆逐することに成功したアッカド王朝の「全土の王」（第 1-3 代）に求めた。他方、その子ナラム・シンはハンリン盆地を起点としてティグリス中流域やハブール流域にまでの覇権拡大に尽力するが、この意図は既にイピク・アダド 2 世に見られるものでもある。その遺志を継いで北部地方（スバルトゥ地方）の制覇を目指すナラム・シンのイメージは、まさしくアッカド王朝第 4 代ナラム・シンによるハンリン経由での「スビル地方から杉の山まで」（RIME2.1.4.25）の制覇の記憶とその遠征路上に残された「神なる征服者ナラム・シン」の祈念碑画像に仮託されたものであったに違いない。

## 3. ハムラビの占領地行政—官僚組織と耕地経営の実態

中山 八歩

ハムラビはバビロニア南部のラルサ王朝を征服してバビロニアの統一を成し遂げた。彼自身は旧ラルサ王朝支配領域（ラルサ地域）に常駐することなく、代わりに派遣した行政官僚団（主に、ラルサ地域行政全体の責任者シン・イッディナムと同地域の王領地経営責任者シャマシュ・ハージル）への行政書簡を通じて、この占領地を統治した。ハムラビあるいはその臣下ル・ニヌルタが現地の行政官僚団に送った命令は、耕地の給付や裁判、運河管理、徴税など多岐に渡り、新たにイルクム（奉仕）義務を基礎に据えた体制へと転換が図られたことが示唆されている。本発表では、行政官僚団の命令系統や権能、そして個人に給付された耕地の経営について考察し、官僚組織と耕地経営の図を提示した。

バビロンのハムラビのもとでは王宮と神殿に大別し、ラルサ地域のそれぞれの人員と耕地を管理した。神殿を担当する最上級官僚が二人存在し、ル・ニヌルタは王宮を担当する最上級官僚の一人であった事実から、王宮を担当する最上級官僚が彼と並んでもう一人存在し、王宮も二人体制で管理していたと考えられる。神殿のケースしか確認できなかったが、現地担当官として徴税の責務を負っていたのは、会計官と一般的に理解されるシャタンムであった。王宮のケースでは、現地担当官は職能の一つとして、高官に給付されたと見られる耕地の経営を請け負っていた。現地担当官はミクスムと呼ばれる取り分を高官の手下に現場で引き渡す一方で、耕地保有者たる高官は耕地の経営自体には直接関与しなかった。ミクスムは耕地保有名義者に対して、一定の収入を保証する「禄」のようなものと解釈するのが妥当であろう。

また、高官に給付される耕地とは別種の耕地と考えられる、イルクム義務を伴う耕地については、ハムラビ「法典」やその他の行政書簡から明らかなように、イルクム義務者とイルクム耕地を伴う耕地の保有者が一本化された。

すなわちイルクム義務者は2つの義務を負うことはなく、別に新たな義務が課されることが禁止されるという原則が再確認できた。

今後まず、王領地経営に携わる官僚の権限と命令系統に注目して、シャマシュ・ハーヰルとともに王領地経営の一端を担った数名の官僚、そしてシン・イッディナムの権能について、明らかにすることが課題である。

#### 4. Araziqa 考—中アッシリア対ヒッタイト

山田 雅道

ミタンニの崩壊後、ヒッタイトに支援された残存フリ勢力との度重なる闘争に打ち勝ち、アッシリアは西方への勢力拡大を着実に進めていった（前13世紀）。ハブル川下流沿岸のドゥル・カトリナムはそのための重要な政治的・軍事的拠点であったことが知られている。ただしハブル以西、ユーフラテス河を目指すさらなる勢力拡大をめぐる従来の議論（A. Harrak: 1987年）は、史料上の制約から、北部方面侵略の問題に限定されがちであった。そこで本発表においては、その後刊行された新たなアッシリア史料をもとに、南部方面（特にユーフラテス河沿岸地方）の侵略を検討課題とした。

ここでまず確認しておくべきは、トゥクルティ・ニヌルタ1世の治世下に、アッシリアがバリフ川沿岸地方までを既に支配圏に収めていた事実である（BATSH 4 2）。バリフ以西に関し、同様の状況を示す証拠はないものの、特筆すべき史料として同王治世の Dez 3281 がある。これはアッシリア支配下の町々その他への大麦支給を扱った文書であるが、その町々の一つとして Araziqa が言及されている。これは実に驚くべきことであった。というのも Araziqa は、ほぼ確実にユーフラテス河畔（エマルの北方 Tell el-Hajj?）に同定される地名であり、エマル文書 AuOr 5-T 13 によると完全にヒッタイト支配下に置かれていたことが知られているからである。このように Dez 3281 は、アッシリアが南部方面においてユーフラテス河岸に到達した事実をたしかに証明する。しかしその一方、前13世紀のエマルにおけるヒッタイト支配の安定的継続性を考慮すると、これを分断する Araziqa の征服と支配が、ごく短期的な事態であったろうこともまた疑いえない。

このような状況に関連して、MARV III 19（シャルマネセル1世治世後期）が示唆するエマル襲撃もまた注目に値する。この事件が上記した Araziqa 征服と同じ軍事遠征によるものか否かについてはなお検討を要するものの、エマル文書 Emar VI 42 には「フリ軍勢の王」によるエマル攻撃が報告されているからである（ピルス・ダガン治世）。当時の時代状況を考慮すると、M. C. Astour が提案したように、この王がアッシリアの「副王」的存在であったドゥル・カトリナムの行政長官（その称号の一つは「ハニガルバトの地の王」）を指している可能性は高いと思われる。この場合、南部方面の侵略を担ったのは、ドゥル・カトリナム発のアッシリア別動軍であったということになる。

#### 5. 古代西アジア青銅製腕輪の編年と流通に関する一考察—ヒダージュ1＝ケルン墓群出土の丸端部腕輪を中心に して

足立 拓朗

西アジアの古代遺跡からは、装飾品として青銅製腕輪が大量に出土している。しかしながら、これまで詳細な研究はあまり行われてこなかった。本研究は青銅器時代から鉄器時代に至る青銅製腕輪の形態変化を整理し、特徴的な丸端部腕輪の年代的な位置づけと流通について論じる。

現在、シリアのビシュリ山系においてヒダージュ1＝ケルン墓群の調査が行われている。同ケルン墓群の10号ケルン墓から青銅製腕輪が出土した。平面形はほぼ円形であり、外径約6.1-5.4cm、断面形は円形で、その径は約0.4cmである。端部はやや膨らみを持ちながら丸く収まり、若干上下にずれて接している。端部近くに刻みが巡っているのも特徴である。この刻みは摩耗しているが、側面からは明瞭に観察することができる。

10号ケルン墓出土資料と最も類似する資料は、テル・アブ・ハッパ遺跡（古代名シッパル）の新バビロニア期あるいはアケメネス朝期とされる14号墓や、南ヨルダンの前1千年紀前半に年代づけられるキルベト・ダリ（Khirbet Dharib）遺跡、そして北イランデーラマン盆地の前1千年紀半ばに属するガレクティ遺跡5号墓および9号墓から出土している。キルベト・ダリ遺跡とガレクティ遺跡からは、蛇頭状の端部を持つ腕輪が相伴している。このような蛇頭状端部は、モレイの述べる単純な端部から動物頭部への過渡期的資料である。

10号ケルン墓出土の丸端部腕輪は、蛇頭状端部腕輪と相伴し、その年代幅は少なくとも前1千年紀の第1～3四半

期に含まれることが分かる。興味深いのはその分布である。発見例は少ないものの、パレスティナ、シリア、メソポタミア、イランの広範囲に及んでおり、このタイプの腕輪が広く流通した可能性を示している。丸端部腕輪の前段階のシンプルな端部付腕輪はあまりにも形態が簡素なため、類型化が困難で、編年や分布を論じるのが困難であった。しかし、丸端部腕輪は他の腕輪と明確に識別できる形態的な特徴を有している。今後はさらに丸端部腕輪資料を渉猟し、これを年代観の基礎として青銅器時代から鉄器時代の青銅製腕輪の広域編年を精査することが肝要である。

## 6. ウラルトゥの長剣について

津本 英利

紀元前二千年紀前半、東アナトリアおよびトランスコーカサスの山岳地帯を拠点に隆盛したウラルトゥ王国の都城あるいは墓といった遺跡からは、特徴的な長剣がしばしば出土している。すなわち、舌状の茎（なかご）をもつ長い鉄製の剣身に、銅（あるいは銀）製の把手金具が装着され、先端が角張った鞘に収められていた型式の剣である。

銅製の把手に鉄製の剣身というバイメタル構造、そして西アジアの剣の伝統では稀な長さという点では、イラン北西部～トランスコーカサスにこの型式の長剣の祖形を求めることができる一方、舌状の茎に鋸を用いて把手を固定する構造はむしろ後期青銅器時代末期の東地中海世界に流布したナウエ 2 式長剣、すなわち紀元前二千年紀半ばの中央ヨーロッパにその淵源を持ち、鉄器時代の地中海世界にひろく分布する型式の長剣と共通する特徴をもつ。すなわち、北西イラン～トランスコーカサス系の技術と地中海系の技術を併せ持っていることが指摘できる。

この長剣はウラルトゥの遺跡から出土するのみならず、ひろくトランスコーカサス、中央アナトリア、イランのクリスタン地方（War Kabud 墓地群）に分布し、碑文などの文献史料から想定されるウラルトゥ王国の版図の範囲を大きく越えている。これはおそらく南方のアッシリア帝国の脅威に対抗したウラルトゥによる外交活動の結果、すなわち儀器・威信財として長剣がウラルトゥに友好的な当地の有力者に贈与されたり、あるいは国内の有力者に対する褒賞として下賜されたりした結果によるものと推測される。

ウラルトゥの金属器（ベルト、矢筒）に彫られた図像表現からは、この剣に特徴的な角張った石突しか確認できない。この型式の剣が最も精密に表現されている図像資料は、ウラルトゥではなく北シリアの後期ヒッタイト遺跡であるカルケミシュで発見されたオルトスタットである。すなわち紀元前 8 世紀半ば頃のカルケミシュの支配者ヤリリス（Yariris）とその息子カマニス（Kamanis）、そして廷臣たちがこの剣を帯びている様が彫られている。これまでの図像研究により、この当時の後期ヒッタイト美術にはアッシリアの影響が指摘されており、政治的にもカルケミシュはアッシリアに従属していたものと考えられているが、その支配者がウラルトゥ様式の剣を帯びているこの場面は、ウラルトゥと北シリアの政治的・文化的交流を考える上で一石を投じるものである。

## 7. ヒッタイト王への脅威—歴史的背景の考察

平敷 イネ

本発表では、ヒッタイトの王ハットゥシリ III 世、トゥトゥハリヤ IV 世、タルフンタッシャのクルンタに焦点をあて、ヒッタイト王への脅威と題し、歴史的背景の考察から、特異性が認められる事象の一解釈を示した。

既に私は、現在確認できる限りヒッタイトでは山の神の具象表現がトゥトゥハリヤ IV 世から、王の印影上に初めて認められるようになり、また同王の印影出土数が同王以前と比較して、急激に増加することを指摘してきた。又、ヤズルカヤでは山の神は天候神の足元に描かれること、山の神は低位の神であったことから、王の山の神に対する嗜好はヒッタイトのパンテオン内における体系の変化ではないかと当初は考えた。しかし、明瞭な変化は確認できなかった。

ヒッタイト帝国時代以降、儀礼や王族がフルリの名を持つなど、フルリの影響が非常に顕著になることは、多くの研究により明らかにされているが、トゥトゥハリヤという名を検証していくと、最古の事例では限定詞を伴う「聖なる山トゥトゥハリヤ」としての叙述が見られ、聖なる山トゥトゥハリヤは様々な異なる民族的、宗教的背景をもつ人々が存在していたヒッタイト国内で、ハッティ系のコンテクストにのみ認められることが分かってきた。

当時の歴史的背景であるが、トゥトゥハリヤ IV 世の父、ハットゥシリ III 世は、当時の王ムルシリ III 世と対立し、ムルシリ III 世を失脚させ追放して自らが王となった。ハットゥシリ III 世は、イシュタル神との結びつきが強調された、ハットゥシリ III 世の棄明と称される文書を残した。また、トゥトゥハリヤ IV 世にイシュタル神を守護神とす

るように勧めるが、トゥトゥハリヤ IV 世はその勧めを断ったことが知られている。

トゥトゥハリヤ IV 世の治世時、失脚したムルシリ III 世の弟クルンタは、タルフンタッシャに封じられていたが、クルンタの印影にはトゥトゥハリヤ IV 世と同様に大王及びタバルナ/ラバルナの称号が表されており、首都ハットゥシャを脅かすような力を持っていたのではないかと考えられる。その為、トゥトゥハリヤ IV 世はイシュタルではなく、アナトリアの先住民ハッティとの繋がりを強く打ち出し、自身の王位継承を対外的に周知させ、青銅版文書として知られる契約をクルンタと結び、迫りくる脅威を牽制しハットゥシャにおける自身の地位を強固にしようとしたのではないかと解釈した。

## 8. 聖書ヘブライ語における『笛』の釈義的考察

竹内 茂夫

ヘブライ語聖書の中で、「笛」「フルート」と邦訳されている語は 10 回程度しか現れず、それらのうちのあるものは、笛の類ではないという指摘すらなされている。

まず、5 回 (1 サムエル 10:5, 1 列王 1:40, イザヤ 5:12, 30:29, エレミヤ 31:36 [2 回]) 現れるハーリールは、七十人訳において「アウロス」と訳されていることや (ただし 1 列王 1:40 は「クロス」), アシュドド出土の 5 人の楽師付きの酒杯 (前 8 世紀) その他の考古学資料から、ギリシアのアウロスあるいはエジプトの壁画にもよく見られる双管の笛と見なせるかもしれないが、ヘブライ語自体から必ずしも明確ではない。

次に、新改訳で「フルート」、新共同訳等で「笛」と訳されているが冠詞付きのハンネヒーロートは 1 回しか現れず意味不明で (詩篇 5:1 [邦訳では表題]), 七十人訳では「相続」と訳されており、楽器かどうか不明である。さらに、前置詞「エル」(〜へ[向かって]) がここのみ現れているが、詩篇 92:4 のように「アル」(〜の上で) に読み替えない限り楽器と見なすことは難しいと思われる。発表者は、ハンネヒーロートが何であるにせよ、前置詞と冠詞を含めてこの句全体が未知の曲の歌い出しもしくは旋律の名前ではないかと考える。

最後に、伝統的に「笛」と解釈されているウーガーブという語は 4 回 (創世記 4:21, 詩篇 150:4, ヨブ 21:12, 30:31), および死海文書の詩篇 (11QP<sup>a</sup>/11Q5) 151A:4 に登場する。しかしながら、七十人訳ではオルガノン「道具」やプサルモス「賛歌、詩篇」のように特定の楽器ではない語や、創世記においてはキタラ「豎琴」と訳されることから、何らかの弦鳴楽器と解釈する見解もある。対語としても、弦鳴楽器で旧約聖書によく見られるキンノール「豎琴」や、正体不明ながらも弦鳴楽器とされるミンニーム (詩篇 150:4. あるいは 45:9 も) が現れる。

聖書ヘブライ語において笛の類の出現回数が少ない理由として、1) 単に記述がない、2) 神殿礼拝では歌が主体であり歌いながら笛は吹けない、といったことの他に、3) 同じ東地中海文化圏の一部と言えるギリシアではアウロスのような双管の笛はもっぱら女性が吹く楽器であり (エジプトでも)、さらには 4) エロティックなことや陶酔に関連するとされていることから避けられたのではないかとすることを指摘した。

## 9. イエフ革命の史実性

長谷川修一

前 9 世紀後半にイスラエル王国を統治した王イエフは、旧約聖書の列王記、ならびにアッシリアの王碑文に言及されている。列王記下 9-10 章 (以下「イエフ物語」) はイエフのクーデター、そしてそれに続くイスラエルからのパアル宗教一掃を記録している。また、アッシリア王シャルマネセル三世の碑文には、アッシリアに朝貢するイエフが描かれている。

イエフによるこのクーデターは、長らく史実と考えられてきた。しかし近年、聖書本文の史料価値はかつてないほど批判的に検討され、史料として用いることができる聖書本文を徹底的に厳選する傾向にある。イエフ物語が列王記に編年されたのは、出来事が起こった紀元前 9 世紀半ばから少なくとも約 200 年後以降であったと考えられているため、その記述の史実性にも疑問が投げかけられている。本研究は、イエフ物語に描かれているイエフ革命の史実性を、聖書本文、聖書外史料を用いて再検討する。

比較史料の不足から、イエフ物語細部の史実性の実証は極めて困難である。そこで、本研究では実証の困難な細部ではなく、物語全体の成立過程を分析することによって、イエフ革命の史実性を検証する。

イエフ物語に革命を正当化する箇所が点在する事実は、同物語が当初、革命を支持する意図で作成されたことを意

味しているだろう。したがって、同物語の原型が作られた時代・状況はおそらく革命後、イエフ王朝の支持者によってであると考えられる。

イエフの名はアッシリアのシャルマネセル三世の碑文に、アッシリアに朝貢する王として登場する。イエフ王朝の前のオムリ王朝の王アハブが反アッシリア連合に名を連ねていたのに対し、イエフもその孫ヨアシュもアッシリアに朝貢していたことは、この二つの王朝が相反する対アッシリア政策を取っていたことを示す。イエフの貢納が前 841 年、シャルマネセル三世のダマスコ遠征の折だったことを考えると、それまで反アッシリア政策を取っていたオムリ王朝下のイスラエルで、新アッシリア的なイエフが政権を奪取し、アッシリアに朝貢した可能性もありえる。しかしアッシリアによるダマスコ征服が失敗に終わったことにより、イスラエル王国はアッシリアではなく、隣国のアラム・ダマスコによって次の半世紀間支配されることになるのである。

上記の考察は、イエフ革命が史実であったことを支持している。

### 第3会場

#### 1. 古代エジプトの民間信仰ーアコリス遺跡出土の土製品から

花坂 哲

エジプト中部、ナイル河東岸に位置するアコリス遺跡で出土したヒト形土製品を取り上げ、民衆の生活に根ざした信仰の一端を明らかにすることを目的とした。

ヒト形土製品はこれまでに 58 点の出土が確認されており、いずれも指などで整形による粗製品である。高さ 6~9cm、幅 5cm、厚さ 1cm ほどで、頭部と胴体部からつまみ出した短い手足を持つヒト形状を呈している。胴体部に小さな円盤状の突起物がつくことが、このヒト形土製品の最大の特徴となっており、全 58 点中 48 点で確認できる。突起物は、ほとんどが腹部に 1 つだけ付いており、「ヘソ」を表しているものと思われる。「ヘソ」は女性や母性を表すものとされるが、女性の身体表現でより強調されるべき乳房や陰部といった表現はなく、外観上から男女を区別することは難しい。

頭部は胴体部から細く突き出した頸部に土塊を巻きつけて作り、扁平な胴体部に比べると大きな丸みを帯びた形状である。頭部が完全に残っているものは 1 点もなく、すべて破損した状態で出土している。土中で自然と頸が折れて破損したというよりも、意図的に頭部を打ち欠いたようである。また、胴体部に垂直方向の線刻が見受けられる製品が全 58 点中 17 点ある。そのうち 10 点は背面まで線刻が貫いており、いったん左右に身体部分を裂いて、再び接合した痕跡と思われる。バラバラになった身体を繋ぎ合わせることによって復活する、または、バラバラにして撒かれた神の身体から様々な農作物を得る、といった内容の神話は世界各地に存在している。

本発表で取り上げたヒト形土製品も、意図的に頭部を破壊し、胴体部を左右に裂くといったことが行われていたのだろうか。こうした行為を日本の大祓で用いられる「ヒトガタ・依代」などから着想し、出土したヒト形土製品は、災いを避けるための「身代わり」とする民間信仰に用いられたのではないかと考えた。古代エジプトでは、王や神官によって神殿で執り行い、世界・宇宙の秩序を維持するための公的祭祀と、一般民衆が神殿の前庭部や区外において神々に祈りを捧げる私的祭祀があったとされる。本発表で取り上げたヒト形土製品は、公的・私的祭祀とも異なる、より庶民的でローカルな民間信仰の存在を想起させる。この土製品に託した願いは、安産や子供の順調な成育、さらには農作物や家畜の豊穰といった、現世利益を求めたものだったのだろう。

#### 2. エジプト先王朝時代のヒエラコンポリスにおける石器製作のバリエーション

高宮 いづみ

エジプト南部に位置するヒエラコンポリスは、先王朝時代ナカダ文化期最大の遺跡として著名である。上エジプトにおける最有力王国の首都があった遺跡と目され、低位砂漠の広範囲にわたって集落址が検出されている。本発表では、同遺跡 HK11C 地区 A6-A7 区画と HK29A 地区出土の石器から、該期の先進集落における石器製作のバリエーションを明らかにし、石器製作の専門化過程解明への端緒としたい。

先王朝時代の集落の石器研究には、1980 年代から D. H. Holmes が本格的に着手した。その際、ヒエラコンポリス出土の石器も考察対象となったが、資料は HK29 地区と HK29A 地区出土の石器に限られていたため、同遺跡における石

器製作の全体像を明らかにするには至らなかった。

発表者は、2003年からヒエラコンポリス遺跡 HK11C 地区 A6-A7 区画の発掘調査を開始した。2008年3月までに同区画からは概ねナカダⅡ期に年代付けられる計約 3600 点の石器が出土し、そこには多様な技法を用いて製作された石器が含まれていた。さらに、2008年に HK29A 地区の神殿址から出土した石器を観察する機会を得て、「神殿付属工房」に由来すると考えられる石器群の資料を入手した。石器の 99%がフリント製であるため、ここでは以下にフリントのみを扱うことにする。

HK11C 地区 A6-A7 区画出土の石器を、チェーン・オペレーションを考慮しながらブランク製作技法別に分けると、主要なものだけでも、剥片、石刃（不定形）、石刃（定型）、大型石刃、小型石刃、加熱処理石核からの小型石刃、両面加工の7種類が認められた。これらのうち、剥片技法に関連する石器（石核・剥片・ツールを含む）が全体の約 54%と主流を占める。石刃は、定型・不定形を合わせて約 14%とそれに次いで多く、同地区付近で製作されていたと考えられる。一方長さが 12~15cm の大型石刃は、ツールが少数出土したのみ（約 1%）で、集落外からの搬入の可能性はある。小型石刃は、4.7%と出土比率は低いものの、石核が複数出土していることから、同地区近辺で製作されたことが確実で、その約半数は加熱処理した石核から製作されている。同地区付近で両面加工石器が製作されたことは、多数（6.6%）の調整剥片から推測される。上記のように、HK11C 地区 A6-A7 区画では、大型石刃を除いて多様な技法を用いて石器が製作されていたが、石器の製作者については明らかではない。

一方、HK29A 地区「神殿付属工房」由来の石器は、上記7種のうち両面加工と小型石刃が多数を占め、Holmes によって、フル・タイムの専門職人の関与が推測されている。そこで、両者の比較から、当時の石器製作組織について考察を試みたい。

なお、本発表に関連する調査は、平成 19 年度高梨学術奨励基金の助成を得て実施され、調査・研究には遠藤仁氏に多大なご協力を頂いた。

### 3. 古代エジプトにおける土器生産の専門化

馬場 匡浩

エジプト学では近年、初期国家形成期にあたる先王朝時代研究において、専門化の問題が取り上げられている。とりわけ土器生産に関する言及が多く、ナカダ期の土器生産の専門化は夙に指摘されているところである。しかし分析を交えた実証的な研究は決して多くはない。その理由は、製作址等の検出例が極めて少ないという資料的制約が大きいのだが、幸いにも近年、ヒエラコンポリス遺跡で土器焼成施設と思われるナカダⅡ期（HK11C B4-5）の遺構が検出され、専門化の分析に耐えうる資料を得ることができた。よって本発表では、当遺構の資料を用いて、ナカダ期における土器生産の専門化を具体的に検討した。

専門化を議論するにはまず、専門の存在とその度合いを認識する必要があるが、今回の分析では、当遺構の主な生産品と思われるスサ（切り藁）混粗製胎土のモデルド・リム壺を用いて、規格性と効率性からそれらを検討した。規格性では口径の法量分析と変動係数（CV）比較を行ったが、口径値はほぼ 16cm と 18cm に集中し、CV 値も他の遺構資料と比べて相対的に低いことから、規格性が高いものと判断された。効率性では薄片観察により、スサ混粗製土器の胎土製作時の効率性を精製土器と比較して考察した。結果、精製胎土は水簸等の入念な下準備がなされ、粗製胎土は夾雑物を取り除く程度の準備であったと推察された。質の悪い粗製胎土も効率性の点からみれば、水簸という手間を省いた低コストの製作と捉えることができ、効率性を指向した生産であったと解釈された。

以上の分析から、モデルド・リム壺には専門化の特徴が明瞭にみられた。そこで次に、その生産形態の具体的な内容について、コストイン（C.L. Costin）の分類指標に則して考察した。遺構の様相とモデルド・リム壺の詳細な観察から、製作技術にみる専門度は比較的高く、その生産形態は常勤陶工による集中工房で、それはエリートお抱えの従属専門であった可能性を指摘した。当遺構が比定されるナカダⅡ期は、社会のあらゆる側面が王朝成立に向けて加速する時期とされる。基本的に保守的である土器製作が専門性の高い生産体制へと変容するには、それを必要とする社会的需要があったからにはほかならず、それは再分配システムを求めるエリートの台頭といった政治・宗教的側面、またマーケットの発達といった経済的側面の変容がこの時期に起こったことを物語っている。

#### 4. トウトアंकアメン王によるカルナク、アメン大神殿の復興について 河合 望

エジプト新王国時代第 18 王朝のアクエンアテン王は、アテンを最高神とするアマルナ宗教改革の断行にあたり、かつて国家神であったアメン神を含む伝統的な神々に対する迫害行為をエジプト全土で展開した。迫害行為の最大の標的となったのはアメン神の総本山であるテーベのカルナク、アメン大神殿であった。神殿の壁面全体にわたって、アメン神の名や図像が削り取られ、神像も破壊を受けた。しかし、アクエンアテン王の宗教改革は失敗し、その後継者はアメン神をはじめとする古代エジプトの伝統的な神々の信仰を復興することを余儀なくされた。この伝統主義への復帰は、特にトウトアंकアメン王の治世に活発に推進された。「トウトアंकアメン王の復興碑」には、同王がアクエンアテン王の治世に荒廃したエジプト全土の伝統的な神々の神殿を再開し、神官を新たに任命し、王家による神殿の増改築、供物の寄進を再び行ったことが記されている。しかし、復興碑に記された記述は漠然としたものであり、具体的な復興事業の内容は明らかになっていない。また、トウトアंकアメン王は復興事業の痕跡は、後世の王が同王の修復を自らの修復として改ざんし、破壊、再利用したため、これまであまり明らかではなく、その様相についてはこれまで包括的な研究が行われていなかった。

発表者は以上のような問題意識に基づき、現地調査を試み、具体的な復興事業の痕跡について検討した。その結果、トウトアंकアメン王はほとんど全ての塔門でアメン神の図像の修復を行い、アメン神の御神体がある至聖所の周囲に自らの修復を示す碑文を残している。さらに、第 10 塔門とムト神殿の間のスフィンクス参道ではアクエンアテン王とネフェルトイティ王妃を表した頭部をアメン神の聖獣である牡羊に改造し、台座には自らの名前を記している。トウトアंकアメン王は、このような既存の神殿における修復・改造だけでなく、自らの神殿「ネブケペルウラー、テーベを復興する者の神殿」と「ネブケペルウラーの神殿」をカルナク神殿域に造営した。さらに、トウトアंकアメン王は、自らの容貌で表現された多くのアメン神の像を製作している。このように、復興事業は実際に大規模なものであったことを指摘することができた。これは、アマルナ王家出身のトウトアंकアメン王にとって伝統的な宗教への帰依を表明するに必要な政治的プロパガンダだったのである。

#### 5. 古代エジプト・新王国時代の私人墓における性差表現 和田 浩一郎

女性にもさまざまな権利が与えられていたとはいえ、古代エジプトの社会は基本的に男性中心の社会であった。埋葬というエジプト文化の重要な一面においても、その状況に変わりはない。本発表は、新王国時代の私人墓の壁画における墓主とその妻が、どのようなものを身につけて表現されているかという点に着目し、図像表現に見られる男女の描き分けとその推移、さらには副葬品を中心とした物質文化の性差について検証を試みるものである。

今回分析対象とするのは、テーベ西岸とサッカーラに造営された当該時期の墳墓である。これらの墳墓において、墓主夫妻を含む男女はヘアスタイルや衣服、あるいは肌の色について首尾一貫した明瞭な描き分けがなされており、特筆すべきような例外は認められない。ただし装身具については、ヘアバンドの装着がほとんど女性に限定されるという傾向が認められる。さらに墓内装飾を詳細に見ていくと、墓主夫妻で明瞭に異なった傾向を示すものが存在することが認められる。それはサンダルを履いているかどうか、ということである。すなわち夫妻が共に描かれる供物奉獻の場面などで、夫だけがサンダルを履いている例がしばしば認められるのである。それではサンダルには、どのような意味が込められているのだろうか。

中王国時代の棺には、しばしばサンダルの図像が描かれる。これはミイラ作りの場で使用されていたものが表現されたと解釈されており、特に神官が身につけるものとしてのサンダルが、埋葬に関わる装飾のなかでクローズアップされていたことが窺われる。またナルメル王のパレットに王のサンダル持ちが登場しているように、身につける人物の社会的地位を示す重要な日用品としても早くから重要な意味を持っていたと言える。こうしたことから、サンダルを履いて表現されていることは墓主の社会的地位、とりわけ神官職との結びつきであることが推測される。ところで墓内装飾で墓主がサンダルを履いている事例を年代別に見ていくと、事例の大半はアマルナ時代終焉以降に描かれたものであることが明らかとなる。そこでアマルナ時代を境として、墓主にはサンダルを履かせるべきであるという、観念上あるいは美術表現上の変化が生じた可能性が高い。その変化には、どのような背景があったのだろうか。またこのような表現の変化は、副葬品にも影響を与えているのだろうか。検証を進めてみたい。

## 6. Innovation or re-import ?—古代エジプト新王国時代におけるシリア・パレスチナ起源の神々に関する図像学的 一考察

田澤 恵子

古代エジプト新王国時代に王家から庶民に至るまで崇拜された、シリア・パレスチナ起源の六柱の神々（パアル・レシェフ、ハウロン、アナト、アシュタルテ、カデシュ）の図像表現については、「エジプト化」されたものが多く、元々の土地でのスタイルに関して確認することは容易ではない。以前より、シリア・パレスチナ地域の美術様式にはエジプト、アナトリア、そしてメソポタミアの影響が大きいことは指摘されており、このことから、一度レヴァント地域へもたらされたエジプトの図像様式が、同地域から伝わってきた上述の六柱の神々と共に、「再輸入」と言う形でエジプトへ戻ってきた可能性が大いに考えられる。本大会では、そのケーススタディとして、女神カデシュの図像表現について報告した。

一般的にカデシュを表すとされる「正面向きの裸の女性が、足を揃えて左右どちらかに向けるか、もしくは左右に開く姿で動物の背の上に立ち、真横に向けてV字型に伸ばした手には蛇か花、もしくはその両方を持つ」図像のうち、（1）正面を向いた裸の女性立像、（2）動物の上に立つ女神像、（3）手に握られた蛇、の3点について検討した結果は以下の通りである。（1）については、新王国時代以前にエジプトからシリア・パレスチナに「輸出」された一部の様式が、同時代以降カデシュという神の概念と共にその図像表現としてエジプトに「再輸入」された可能性が考えられる。（2）については、元々エジプト起源のモチーフではなく、カデシュに関しては、メソポタミアの女神イシュタル像の影響が大きいと思われる。そして（3）の「蛇」に関しては、呪術的守護と死後の再生や安寧を蛇に願うエジプト的概念が反映されていると考えても問題はないように思える。

以上のことから、新王国時代のエジプトでみられた所謂カデシュ・スタイルと呼ばれるものは、カデシュがシリア・パレスチナから伝えられた女神とは言え、決してその地域の要素を全て持ち込んだわけではなく、またエジプト様式が全て取って代わったわけでもなく、以前エジプトからシリア・パレスチナへ伝わったと思われる意匠が「再輸入」されたり、新しいものがエジプトへ持ち込まれたり、またエジプト的概念を重視したアレンジが施されたりした結果であると考えられることができる。

## 7. ナパタ時代におけるクシュ王国の埋葬に関する一考察

坂本 麻紀

エジプトの南に広がるヌビアで紀元前1千年紀初頭に興ったクシュ王国では、古代エジプト第25王朝（747-656 BC）を成立させたクシュ王ピイが自らの墓にピラミッドを採用して以来、ナパタ時代（1000-300BC）だけでなく、その後継のメロエ時代（BC300-350AD）まで1000年以上に亘って王墓地にピラミッドが造られる。

クシュ王国の本拠地であるナイル川第4急湍のナパタ地域には、ピイ以前の「先祖」と呼ばれる人々や、ピイの息子のタハルカ王を除く第25王朝のクシュ王とその王妃が埋葬された初期の王墓地エル＝クッルと、タハルカによって墓の造営が始まり、ナパタ時代末までクシュ王とその王妃が埋葬されたエル＝クッルの後継の王墓地ヌリがある。また、ナイル川第5～6急湍のメロエ地域には、ピイの治世に墓の造営が始まりメロエ時代まで王族や高官などの墓が造られた West Cemetery と South Cemetery がある。

エル＝クッルでは、ヌビアのCグループ文化（BC2300-1550）の墓と類似しているといわれる「円柱形の墳丘墓」から、ピイが新たに導入した「ピラミッド」まで様々な型式の墓がみられるが、ヌリでは「ピラミッド」のみとなる。この2つの王墓地では、「墓の構造も埋葬方法もヌビアの伝統的なもの」→「墓の上部構造はエジプトの影響を受けているが地下構造と埋葬方法はヌビアの伝統的なもの」→「墓の構造はエジプトの影響を受けているが埋葬方法はヌビアの伝統とエジプトの要素を結合したもの」→「墓の構造も埋葬方法もエジプト的なもの」という変遷がみられる。伝統的なヌビアの墓から徐々にエジプトの影響を受け、ピイの時期にはエジプトの棺埋葬とヌビアのケルマ期（BC2500-1500）のベッド埋葬を融合させるなど様々な試みが行われるが、最終的にはエジプトの要素が強くなり、それはクシュがエジプトを支配していた第25王朝の時期よりも少し後のシェンカマニスケン王（BC643-623）の時期に確立される。

メロエ地域では第25王朝の時期には墓の上部構造は殆どみられず、単純な竪穴墓となっているが、シェンカマニ

スケンの時期には「ピラミッド」が造られ始め、ヌビアの伝統であるベッド埋葬や屈葬が消え棺埋葬や伸展葬のみとなるなど、ナパタ地域と同様にこの時期からエジプトの要素が強くなる。このようにナパタ時代のクシュ王国の王墓地での埋葬に関しては、エジプトを支配していた時期よりも後にエジプト的な要素が強まるといえるだろう。

## 8. 古代エジプトの固有の星座の同定について

近藤 二郎

古代エジプト固有の星座の同定に関しては、依然として不明な点が多い。本発表では、基本的な資料をまとめるとともに、星座の同定に関する幾つかの問題点を整理することを目的とする。固有の星座の主な基本資料としては、古王国時代のピラミッド・テキスト、第1中間期から中王国時代にかけての木棺に描かれた天体図、新王国第18王朝ハトシェプスト女王時代のセンエンムウト墓(TT.353)の天体図、第18王朝アメンヘテプ3世の水時計、新王国第19・20王朝の王墓の北天図、プトレマイオス朝のデンデラ・ハトホル神殿の天体図などがある。

古代エジプトの星座の構成要素としては、天の北極を中心とする北天の星座と黄道の南側を36分割していたとされる36デカンの南天の星座の二つに分けられる。地平線下に没することのない周極星は、「不滅の星々(イクムウ・セク)」と呼ばれ、永遠の生命の象徴として、古代エジプトでは重要な役割を演じていた。一方、南天の星座は、東天に昇り天空を横切って西天まで長い距離を移動していくことから、「疲れを知らない星々(イクムウ・ウレジュ)」と呼ばれていた。歳差運動の影響により、古代エジプトでは天の北極が、現在の北極星(こぐま座アルファ星)ではなく、りゅう座のアルファ星トゥバーン付近にあった。そのため、低緯度地域のエジプトでも北斗七星(古代エジプトのメスケティウ)が周極星であった。メスケティウ以外の北天の星座の同定に関しては、王家の谷の北天図における鏡画像など幾つかの問題点を指摘した。シリウス星(セプデト)やオリオン座の三ツ星(サフ)、その他の星座の同定の問題などについても紹介した。

## 9. パジリク墓群の年代

柳生 俊樹

本発表は、考古美術の立場から、山地アルタイのパジリク墓群における大型墓(1号・2号・3号・4号・5号墳)の年代を考えるものである。

これら大型墓の年代の研究では、考古美術的な検討に加えて、理化学的年代測定もある。例えば、木槨部材の年輪年代測定によって、2号・1号・4号・3号・5号墳の順に、49/50年のスパンで建造されたことがわかっている。しかし、暦年が確定できておらず、放射性炭素年代測定が試みられている。ただ、測定値にはかなり変動があり、かつては前5世紀代、近年では前3世紀代の値が出されている。

考古美術の側からは、前5-4世紀、前4-3世紀、前3-1世紀といった年代観が示されてきた。このうち、前4-3世紀年代観は、1)1号墳や2号墳の出土品に見られる鷲グリフィンの紋様が、黒海北岸や地中海世界では前4世紀を上限とすること、2)3号墳と5号墳で出土した中国製絹織物の年代が、前4世紀末から前3世紀初め頃であること、を根拠としている。近年では、放射性炭素年代測定の結果からも有力視されている。

発表者も、これまでの年代観のうちでは、前4-3世紀年代観が最も妥当なものと考えている。その一方で、発表者は、さらに絞り込みが可能であるとも考えている。その根拠は、2号墳の被葬者(男女)と5号墳の女性被葬者のそれぞれに見られる、入れ墨の紋様の年代観である。

2号墳の被葬者の入れ墨には、身体は嘴のある鹿あるいは馬のようで、端部に耳のある猛禽の頭が付いた角を生やした怪獣の紋様がある。また、5号墳の女性被葬者の入れ墨では、種類の異なる二頭の猛獣が一頭の鹿を襲う光景を表した紋様がある。これらと同様の紋様は、中国北辺(オールドス)、さらに中国本土でも知られている。このうち中国本土の例は年代が比較的明瞭であり、年代決定の大きな手がかりとなる。それらは、おおむね前3世紀代、遅いものでは前2世紀初めに年代付けられている。パジリクの例も、これを大きく外れることはなかろう。

したがって、発表者は、パジリクの大型墓の年代は、おおむね前3世紀代に収まり、前4世紀代に遡ったとしても遅い方、と考える。つまり、前4-3世紀年代観を若干遅い方に絞り込むのである。

もちろん、ここで検討したのはわずかな例である。また中国における関連の年代観も変動する可能性がある。今後、さらに様々な側面から検討を加えていきたい。

## 第4会場

### 1. イスラエルにおけるキリスト教教会堂遺跡の保存とその公開に関する研究

岡田 真弓

本発表の目的はイスラエルにおける教会堂遺跡の保存と利活用の実態把握の足がかりとして、踏査によって状況を確認できた国立公園9箇所にある16教会堂と、フランシスコ修道会施設5箇所にある5教会堂を対象として分析を行い、利活用における差異を考察することである。

両者を比較すると、同じ教会堂遺跡であっても保存状態や展示方法に差異が認められた。その差異の要因として、1つ目に教会堂の性質、2つ目に調査の目的、3つ目に発掘調査後遺跡を管理する者の遺跡に対する価値を挙げることができた。1つ目の教会堂の性質とは、国立公園にある教会堂は4世紀以降、会衆の為の教会として建設され、都市の衰退とともに破棄されたもので、検出された教会堂はその宗教的機能を失った遺構であるため、文化財として全体を保存展示している。一方、フランシスコ修道会施設内の教会堂は福音書と深い関わりがある場所に建てられた記念教会堂であり、何世紀にもわたり同じ場所に教会堂が再建され、現在もそこには宗教上の機能を有した教会堂施設が建っている。結果、「ガラス張り」の手法を使って現在の教会堂直下にある遺構を見せる方法が採られた。2つ目の要因である調査目的の違いとは、前者はビザンツ時代の都市遺跡全体の調査を目的とし、教会堂はその時代を特徴づける一建築遺構として発掘及び利活用などが行われているのに対し、後者は福音書記述にある古代の教会堂の同定を目的とし、教会堂そのものの発掘及び利活用を行っている為に生じる。3つ目の管理者の遺跡に対する価値とは、公開の目的と密接に関わってくる。国立公園を管理している国立公園局にとってイスラエルに現存する遺跡、特に国立公園に指定されたものは教育普及的価値の高いものとして公開され、こうした政策は保存方法を含む展示環境に反映されている。対してフランシスコ修道会施設内の遺跡を管理しているフランシスコ修道会にとって教会堂遺跡の発掘と利活用は信仰の継承を目的としている為、遺構を大理石で覆う「外装」や現在の礼拝施設の一部として組み込む「再利用」といった保存方法が採られた。つまり教会堂を当地域のある時代を特徴付ける一建築物として保存・公開する国立公園局に対して、教会堂が存在していたことに信仰の歴史的事実と継続性を見るフランシスコ修道会、この両者の遺跡に対する価値の差異が現在の保存や公開状態に反映されていると言える。

### 2. 奉献銘文にみるキリスト教会堂建設活動—トランス・ヨルダン地域を事例として

江添 誠

トランス・ヨルダン地域は、紀元前1世紀後半からローマの支配下に置かれ、デカポリスとよばれるおよそ10の都市からなる都市群を中心にローマの庇護を受けて発展した地域である。ミラノ勅令によるキリスト教公認以降、教会堂の建設が活発に行われ、451年のカルケドン公会議にこの地域の各都市から主教が参加していることが記録に残されている。デカポリスの都市群の一つであるゲラサ（現代名ジェラシュ）は都市の中央部に位置している巨大な主教座教会複合体をはじめとして19もの教会堂が考古学調査によって確認されている。

本発表は、これら19の教会堂のうち、16の教会堂で見つかった奉献銘文を整理、分析し、床モザイクのモチーフなどと合せて検討することにより、ゲラサというトランス・ヨルダン地域を代表する都市におけるキリスト教会堂建設活動の様相を明らかにすることを目的としている。

奉献銘文は、主たるものはアプシスと身廊部との間の内陣障柵手前の床面に長方形枠で囲まれる形で数行にわたりモザイクで記されている。その他のものは身廊部に入る手前の床面や身廊部の床モザイクを囲む枠内などに配されている。銘文の内容は、聖人の名前、主教の名前、資金提供者の名前や身分、建設の年代やその動機、祈願などである。資金提供者は銘文の中だけでなく、その肖像が床モザイクに描かれる場合もある。聖コスマス・ダムリアノス教会では、内陣障柵手前にタブラ・アンサータの形式で縁取られた銘文帯の左右の矩形内に、二本の樹木に挟まれて資金提供者の夫婦が描かれている。身廊部を飾る菱形のパネルのうちの二枚には籠を片手にした人物像が見られ、それらの人物に当たる名前が銘文中に記されている。また、エリア・マリア・ソレグ礼拝堂の内陣に接する横長の矩形パネルには

16の葡萄唐草の円形縁取りの中に鳥や動物などが描かれているが、そのうちの3つに資金提供者の肖像が確認できる。

ゲラサに 19 の教会堂が建設された要因として、次の二点が挙げられる。一つ目は都市の富裕者を支える経済的基盤がゲラサには存在したということである。紀元後 2 世紀初頭に新トラヤヌス街道が設置され、南北の交易路はヨルダン川沿いからこの街道へと移行した。街道からの経済的恩恵を受けることのできたゲラサは交易都市としてローマ帝国の崩壊以降も発展し、豪華な床モザイクを持つ教会堂の建設資金を供出できるだけの富の蓄積が可能であったと考えられる。二つ目は公共建造物建設における伝統の継続である。富裕者が公共建造物の建設を通じて末代までその名を残そうと望む行為は古代世界において共通のものであり、とりわけ古代ローマにおいては都市の発展に欠かすことのできない要素である。富裕者は競って劇場や円形闘技場を建設し、奉献碑文にその名を刻んだのである。4 世紀以降、劇場などの大型公共建造物の建設が激減する一方、キリスト教の広がりとともに富裕者の「気前のよさ」「寛容さ」を示す公共建造物は教会堂が主たるものとなったことにより、教会堂が林立する状況が生まれたと思われる。

### 3. ダレル渓谷最奥のチレリ峠に至るハンベリ川河口からの行程—パキスタン北部地方 『法頭の道』現地調査 2007 土谷 遥子

法頭の葱嶺（パミール）から陀歴（ダレル）に至った道筋についての調査のうち、所謂『定説』とされる、キリック/ミンタカ峠からギルギット経由でダレルに至る道程の調査については、2005 年にハンベリ渓谷上流とカルガー渓谷（第 48 回大会発表）、2006 年にハンベリ渓谷からイシコパール渓谷経由でダレルに至るルート（第 49 回大会発表）を実施した。本発表では、これまで未踏査であった、ハンベリ渓谷河口からコトガー/バリガー峠経由で、ダレル渓谷最奥のチレリ峠までのルートの現地調査について報告したい。

ハンベリ渓谷は、ギルギットとダレル渓谷を、カルガー渓谷とともに結んでいるが、上流（2005 年）、中流（2006 年）に次いで、2007 年に河口から上流まで始めて実地調査を行った。ハンベリ渓谷近くのニマから中流のチャマティキ（最後の定住村）までの 30km の間に九村が点在していた。ハンベリ渓谷はパキスタン北部地方で最大の針葉樹林で知られ、中流渓谷は特にヒマラヤ杉の森林に被われていた。A. スタインは、1913 年にダレルを目指してデモットでハンベリ川中流を横断したが、ハンベリの針葉樹林がカシミールのキシヤンガンガ以来初めて遭遇した深い森林であると指摘している（Innermost Asia, Vol. 1, p. 15）ハンベリ川を遡る道は、なだらかで容易な行程であった。

上流域（海拔 3300m）に入ると針葉樹は徐々に減り、河口から 50km のコトガー渓谷の登り口では、完全に消滅していた。コトガー渓谷はギルギット/カルガー渓谷上流域からダレルに通ずる最短の道筋にあたる。急傾斜面には草草が点在していたが、コトガー峠（別名バリガー峠）あたりの荒い岩肌の稜線には植生は見られなかった。バリガー渓谷側は豊かな草原が広がり、緩傾斜でダレル渓谷へと下降していった。このコトガー/バリガー渓谷（全長 20km）は容易な行程でギルギット/ダレルの最適なルートと考えられる。

ダレル川上流域にある関所『ダルバンド』の上流マティックで、バリガー川がダレル川に合流する。更に上流のカソーリで、シンガル渓谷バダフン峠道が、またルーレイでシンガル渓谷ヤジェイ峠道が（2003, 2004 年調査第 47 回大会発表）ダレル 渓谷に至っている。

2007 年の調査で、草原の美しいアートから、針葉樹が徐々に減少するルーレイとその上流のダレル渓谷最奥地域の踏査を実施した。ハラバーから樹木も草地も減り、渓谷は開けてきた。ブドバローの草地の小さな池から流れ出ている小川が、ダレル川の源流であった。ダレルの最奥、チレリ峠は荒々しい岩石の中、植生は全く見当たらなかった。

インダス川と合流するダレル川の河口から 48km のチレリ峠に到達したことで、1998 年に、法頭の足跡を辿ってダレル渓谷の調査が開始出来てから 10 年目にして、ようやくダレル渓谷の全体像の概要を把握することができた。この知見をもとに、法頭の訪れたダレルと、そこへ連なる道との関連について検討を試みたい。

### 4. 中世イエメンのユダヤ教徒

嶋田 英晴

本発表の目的は、11 世紀前後のイラク・エジプトとイエメンのユダヤ教徒の関係に関して、最近入手したゴイティンの論考を受けて以前発表者が著した論稿の結論を修正することである。次に、発表者は「Redundancy」という観

点からユダヤ教徒の共同体を捉えようと考えているので、それについては後半で述べたい。

以前発表者は、エジプトを征服（969年）したファーティマ朝下で財務総監督となった元ユダヤ教徒（ヤアクーブ・イブン・キリス）がエジプトを新しい金融と東西交易路上の中心地とするための財政的基盤を確立する過程で、アンダルス、マグリブ、エジプト、パレスチナ、イラク、イエメン等の同胞が様々な面で協力したと推測した。しかしゴイテインに拠れば、ユダヤ教徒がアデンを経由して紅海を通り地中海へと抜けるインド洋交易に従事し始めたのは11世紀末から12世紀にかけてであり、ヤアクーブ・イブン・キリスの時代（10世紀後半）とはかけ離れ過ぎている。従って、イエメンのユダヤ教徒が早くも10世紀の後半からヤアクーブ・イブン・キリスを支援していたという可能性は極めて低いと言わざるを得ない、というのがゴイテインの見解を踏まえた上での修正後の結論である。

次に、イスラーム世界各地に分散して存在していたユダヤ教徒の共同体を「リダンダンスィー」の観点から捉えたい。「リダンダンスィー」とは、「冗長」や「代理機能性」などと訳されるが、その意味するところは、「ある機構・組織が機能しなくなった場合に備えて、あらかじめ用意された同一機能を持つ機構・組織のこと」である。

イスラーム世界の至る所で分散していたユダヤ教徒は、各地に存在していた共同体のお陰で、もし彼らの共同体を含むホスト社会の治安が極端に悪化したり、彼らの経済活動に不都合な経済的、社会的条件が生じた場合、すぐさま各地の別の共同体へと移住して、より有利な条件でどこに行っても彼らの諸活動、とりわけ商業活動を行うことが出来たのである。実際、各地のユダヤ共同体を頻りに移動して活躍したユダヤ商人の例は枚挙に暇が無い。これは、ユダヤ教徒にとっての一種の「生き残り戦略」であったと考えられる。

## 5. ナーセル・ホスロウ『宗教の顔』におけるザーヒル/バーティンの構造 徳原 靖浩

本研究では、西暦11世紀のペルシア詩人であり、ファーティマ朝イスマーイール派の高位の教宣員であったとされるナーセル・ホスロウの『宗教の顔 *Wajh-i Din*』を取りあげ、「ザーヒルとバーティンの両立」というファーティマ朝の教理が、「バーティン派タアウィールの傑作」とも呼ばれる同書の体系の中でいかに語られているかを考察した。

イスマーイール派の歴史において、啓典の秘教的意味（バーティン）を追求して字義通りの意味（ザーヒル）を軽視するという「バーティン派」的な思潮に対し、西暦10～11世紀に黄金時代を築いたファーティマ朝が、「宗教」のザーヒル（外面）をバーティン（内面）同様に重要視し、両者の不可分性を主張する教義的方向修正を行なったということは良く知られている。

しかし、ザーヒルとバーティンを二種類の「意味」と捉える限り、両者の間に必然的な結びつきを主張することは困難である。では、ファーティマ朝教宣員たちはいかなる理論によって両者が不可分・相互補完的であると主張できたのか。

『宗教の顔』前半には、ザーヒル＝感覚対象＝物質、バーティン＝思惟対象＝意味と定義する大胆な二分法（以下「定義」）が見られる。これは、ザーヒルを〈字義通りの意味〉ではなく、宗教的義務行為や文字テキストの〈意味〉以前の外的形式とし、バーティンをその「意味」と再定義することで、ザーヒル（形式）に対してバーティン（意味）が不可欠であると主張することを可能にするものである。同書前半に見られる、シャリーア遵守と救済の関係や「この世/あの世」の説明、文字の視覚的側面に依拠した秘教的解釈は、この定義と調和する。

しかし、定義を徹底すると〈字義通りの意味〉が位置づけを失ってしまう（恐らく義務行為が所与の前提となっていることと関係がある）にも拘わらず、同書後半のタアウィールにおいては、〈字義通りの意味〉に依拠した解釈も見られ、定義が徹底されていないとの印象を受ける。

形式一般に対する意味一般の不可分性を主張する『宗教の顔』前半の論調に対し、後半の内容はザーヒルとバーティンが不可分であるとは言い難いような、所謂「バーティン派」の秘教的解釈に類するものである。こうした叙述上の変化の理由については未だ不明な点があり、結論を急ぐことはできないが、啓典と行為の間にある〈字義的解釈〉をいかに捉えるかが同書を読み解く鍵であることが予想される。

## 6. アシュアリー派神学における「思弁すること」の根拠づけに関する問題 倉澤 理

本発表では、アシュアリー派神学者イマーム・ハラマインことアブル・マアラー・アブドゥルマリク・ジュワイニー (d.1085) の神学著作冒頭における理論の展開の問題、すなわち思弁論から知識論へと議論が移行するその展開順が、それまでの知識論から思弁論へと移行する同派の神学著作とは異なる傾向を有しているという点を指摘した上で、その変化の要因をジュワイニーが構築しようとした思弁論の構造にあると想定し、その分析を行なった。

ジュワイニーの思弁論は2つの議題から構成されている。思弁とは何か、思弁はどのように知と繋がらうのかという問題、そして思弁をなぜするのかという問題に関する議論が思弁論を形成しているのであり、前者は指示(ダリール)の概念を中心に議論が展開され、後者は思弁の義務性(ウジューブ)という概念が議論の中心となっている。この2つが、ともに上述のジュワイニーの神学著作の新たな傾向の要因となっていると推察されるが、本発表では後者の議論の分析を重点的に行なった。

ジュワイニーの代表的神学著作『導き(イルシャード)の書』の冒頭は、「啓示のもと、成年に達した、健全な理性を有する人間に、第一に義務たることは、世界の偶発性への知へと導く正しい思弁を意図することである」という言葉より始まるが、この「義務である」という語の多義性に着目し、『導き』及び同じく神学著作の『包括(アル＝シャーミル)』における「義務性」に関する幾つかの叙述を検証の上で、この冒頭の叙述の再解釈を試みた。その結果、思弁は、ウンマの合意のもとやはり義務とされる神に関する知と必然的な関係にあることにより、義務であると叙述されうるのであり、さらにはその思弁への意図もまた、この知と思弁の必然的関係の延長線上にあるものとして義務であると叙述される。本発表ではこのように結論づけた。

思弁そして思弁への意図は、知の義務性により義務として成り立つことが今回の分析で明らかになったが、『導き』冒頭の叙述において、その意図が存立する条件として挙げられている「啓示」という概念の分析が、さらなる課題として浮上した。

## 7. 大衆化としての預言者の医学—ギリシア流医学から見た意義

矢口 直英

イスラムの医学という場合、通常は9世紀ごろから盛んになり11世紀のイブン・シーナーで頂点を迎えたギリシア流の医学を指す。研究ではこれが中心的な対象であったが、これとは別にイスラム世界には「預言者の医学」というものが存在する。預言者の医学は14世紀ごろにひとつの完成を迎え、イスラムにおけるもうひとつの医学伝統を成す。しかし預言者の医学は研究では注目されにくく、医学史の周縁として、あるいは独立した区画として別個に扱われる程度であった。例えば、敬虔なムスリムからのギリシア流の医学に対する反発(Bürgerl)あるいは医学の非難に対する擁護(Rahman)などが見なされ、最近ではギリシア医学とイスラムの教義との融合を目指したもの(Perho)と評価された。表面的な違いはあれど、人々の健康の維持と病気の治療を目標としている点では共通しているのだから、両者を一連のものとして捉えることはできるはず。今回はギリシア流医学の延長という観点で、法学者ザハビー(d.1348)および医師アズラク(d.1485)の著作を中心に、預言者の医学を検討した。

文献内部の調査から得られた結論としては、預言者の医学は医学の補強を目指したものと言えるだろう。ギリシア流の医学大系はムスリムの医者に広まっていたが、欠点が無いわけではなかった。四体液という基本概念はシンプルだが、理論となると複雑であるし、治療の手法には見知らぬものも含まれる。こうした既存の医学の欠点を補う必要を預言者の医学の著者らは感じていた。それゆえ彼らはギリシア流の医学大系の複雑すぎる理論を簡略化し、用いる薬物の種類を入手が容易なものに限定した。またギリシアの医学者ではなく預言者ムハンマドをその典拠とし、コーランを治療の中心に据え、ギリシア流の医学に欠けている精神面に関する配慮を加えた。これらの簡略化と補強によって、預言者の医学は手軽で利用しやすいものとなった。さらにイスラムの信仰を用いた治療法やそれ以外のまじないなどを取り入れた結果、その医学は大衆が受け入れ易くなったと考えられる。繰り返せば、従来の医学における困難を排し、大衆が共感しやすい方法を取り入れた。ギリシア医学との関係で観ると、預言者の医学の意義はこう評価できるだろう。預言者の医学に対する当時の評価については今後の課題としたい。

## 8. 『被創造物の驚異』(カズウィーニー著)の挿絵

林 則仁

アル＝カズウィーニー(1203-1283)はアッバース朝期に判事として活躍し、バグダード陥落後はコスモグラフィ

一の研究に没頭した。『被創造物の驚異』は、その研究の集大成であり、当時の科学的・地理学的知識の概要がよく示されている。

これまでの『被創造物の驚異』の挿絵研究では、現存する最古の写本といわれる「ミュンヘン写本」がその後の写本のモデルとなっており、この「ミュンヘン写本」から16・17世紀にインドのデカン地方で大量に製作された写本ら（デカングループ）に至るまで、ほぼ同じ性質の挿絵が伝統的に承継されていることが確認されてきた。この伝達の連鎖を“ミュンヘン・デカン軸”と呼ぶが、その主な特徴として、挿絵の“科学的本質”というものがある。つまり、『被創造物の驚異』は一種の百科事典的役割を担う書物であり、その挿絵の性質もまた科学的視点が強く尊重されている点で共通しているということである。

しかし、この“ミュンヘン・デカン軸”に属さないタイプの写本の挿絵については具体的な研究がなされずにいた。本発表の対象はこの後者のほうであるが、これらの写本の挿絵は、全体的に科学書としての性質を持つてはいるものの、寓話などの物語中心の書物にある挿絵の性質のほうをより強く持ちあわしているのが特徴である。このような現象はアラビア語写本ではほとんどみられないが、ペルシア語版においては15世紀前半には顕著にみられるようになる。つまり、「ミュンヘン写本」などの初期アラビア語写本とは違う挿絵の伝達の連鎖がここで認識できる。

現存する写本を確認する限り、挿絵の本質が当初の科学的なものから物語形式の要素をもったものへ強まったのが、15世紀のシーラーズ製ペルシア語写本であろうとの推測が多角的考察によりできることから、これを暫定的に“ペルシア・シーラーズ軸”と定義し、“ミュンヘン・デカン軸”とは別の軸として扱うことができると考える。イギリスの王立アジア協会所蔵の15世紀後半シーラーズで製作された写本（ラス写本）などを調査した結果、挿絵の本質が変わっているだけでなく、原書には存在しない項目が新たに書き加えられており、それらがシャーナーメなどの物語から取られていることが分かった。また、科学的要素の強い薬草の項目はすべて削除され、樹木の項目も半数以下にまで減らされており、これらが意図的になされたものであることが示された。

## 9. 19世紀後半—20世紀初頭エジプトにおける「血の中傷」

蓼沼理絵子

儀式殺人伝説は、中世以来ユダヤ教徒に対する負のイメージを植え付け、迫害を正当化する根拠とされてきた。この伝説は、ユダヤ教徒がキリストの聖体パンを冒瀆するために、ベサハの種なしパンの中にキリスト教徒の子供の血を混ぜるといったものだ。そのためにユダヤ教徒が、キリスト教徒の子供を誘拐・殺害し黒魔術的な儀式を行うという批難を「血の中傷」という。

しかし、19世紀後半以降この「血の中傷」が、もともと儀式殺人が広まらなかったといわれる地中海沿岸地域を含むオリエントのイスラム社会において頻発するようになるのである。本発表は近代イスラーム世界最大の「血の中傷」であるダマスカス事件（1840年）から現代イスラームにおける反ユダヤ主義の誕生までの過渡期における「血の中傷」の変遷に注目し、エジプトを中心に考察したものである。19世紀後半から20世紀初頭にかけてのエジプトは、近代イスラーム世界において、ヨーロッパの資本と文化の流入により、伝統的イスラム社会が急速な近代化へと向かう時間と場所であり、そこで見られた幾多の「血の中傷」に、セファルディーム社会とイスラム社会との関係の変遷がうかがえる。

「血の中傷」がイスラム社会へと広まっていく過程には、ダマスカス事件以降オリエントのユダヤ教徒の近代化教育に力を注ぐヨーロッパ・ユダヤ教徒の活動、キリスト教徒との経済的対立の歴史、スエズ運河開発による海外資本と移民の急激な流入によるエジプト社会の変動等の様々な要因が背景にある。それは、民衆の社会的不満を背景に、メディアを通じたユダヤ教徒に対する敵愾心が扇動され、ヨーロッパ・キリスト教世界でつくられた儀式殺人伝説と「血の中傷」が、あたかも事実であるかのようにイスラム社会へ受け入れられていく過程でもあった。

つまり儀式のために「キリスト教徒の子供」を盗むという伝説が、いつの間にか「イスラムの子供」にも適用され、「儀式殺人」という行為そのものが、「イスラーム的反ユダヤ神学」の論拠となっていき、現代の反ユダヤ・イスラエル主義の土壌を形成する一因となったのである。近代エジプトにおける「血の中傷」の伝播過程は、まさにユダヤ教徒とイスラム社会との伝統的関係の崩壊の過程を示す指標であったといえるだろう。

## 10. 『カーヴェ』紙とイラン・ナショナリズムの展開

佐野 東生

『カーヴェ』紙の編集主幹であるタキーザーデ（1878－1970年）はアゼリー系イラン人であり、イラン・ナショナリストとして国民国家形成に寄与した人物である。特にイラン立憲革命（1905－11年）において国会議員として憲法補則制定、民主党設立など顕著な業績を残したが、1910年、国会追放処分となりイランを亡命、米国に渡り、1914年の第一次大戦勃発直後、ドイツによる協力要請に応じベルリンに赴いた。そこで、独外務省に働きかけ、イラン・ナショナリスト委員会を設立し、ジャマールザーデ、カズヴィーニーなど在外イラン知識人を招聘、親独宣伝紙として『カーヴェ』紙発行を開始したのである。

『カーヴェ』紙はイラン近代新聞史上、その内容、紙質などの点で高く評価されてきており、戦時中の旧シリーズ（1916年1月－19年8月：全35号。欧州、オスマン帝国、イランに販売）と戦後の新シリーズ（1920年1月－21年12月：全24号（22年3月最終特別号）。主にイランに販売）に分かれる。いずれもイラン・ナショナリズムを基調とし、旧シリーズ第1号巻頭言では「ファリードゥーンを欲する者はザッハークの鎖から逃れよう」とのシャー・ナーメの一節を引用、古代イラン神話に立脚した民族意識を鼓舞して中立国イランに進駐する露軍への抵抗を呼びかけた。しかし戦局の変転に連れ、次第に和平締結によるイラン独立維持の論調に傾き、独敗戦とともに旧シリーズは休刊となった。

新シリーズは戦後、引き続き独外務省の支援を受け、激しいインフレの中2年に亘り発行された。イラン独立と近代化のため「無条件の西洋文明受容」を唱え、従来の政治紙から学術文化紙へと内容を一新し、賛否両論を伴いつつも同紙の評価は高まっていったのである。タキーザーデは各号で「論点と観察」と題するイラン批判論説を掲載し、リアリズム的手法で立憲革命以降の問題点を摘出した。そこでは支配層、宗教界とともに知識人、および大衆自体を痛烈に批判、改革案として国民全体への初等教育普及を提唱した。同時に、ペルシア文学代表作である『シャー・ナーメ』成立史の研究論説を執筆し、写本に則ったイラン人による初めての近代的研究を行った。特に同書著者・フェルドゥースイーの生涯について、その生年を940年頃、執筆開始年をダキーキー没（977/78年）直後、第一稿完成を994/95年、最終稿を1010年頃ガズナ朝に献上としており、近年の研究水準に近い推測がなされている。新シリーズは、パフラヴィー朝期に継承されていく、タキーザーデらによる文化ナショナリズム推進の基となるものであったと評価される。

## 第5会場

### 1. 地域の由緒と美質の語り方—地方史地誌部分の内容・形式・意味

森山 央朗

本報告は、地方史人名録の地誌部分において、地域の由緒と美質が、どのような内容を以て、どのような形式によって描かれ、そうした内容と形式が何を意味するのかを分析した。地方史人名録とは、アラビア語地方史の一種である。記述対象地域の地誌と、同地域で活動したウラマーの経歴を記録した人名録によって構成され、人名録部分が作品の大部分を占める。こうした地方史人名録は、西暦10世紀後半から13世紀前半にかけて、イスラーム世界の各地で多数編纂された。この時代に編纂された地方史人名録は、編纂地域が広範に分布する一方で、内容と形式には強固な共通性を持つ。

地方史人名録は、主に人名録部分がウラマーに関する社会史的研究の史料として用いられてきたが、編纂背景や同時期に各地で同様の作品が多数編纂された原因などは、十分に論じられていない。特に、記述対象地域の由緒と美質を語る地誌部分は、ほとんど無視されてきた。地域社会を分析する材料としては、有効性が薄いからである。しかし、地方史人名録の編纂背景を論じる上では、由緒と美質に関する記述を無視することはできない。また、地方史人名録を編纂し利用した11世紀前後のウラマーの学問活動と、彼らの世界観を考察するためにも、有益な事例を提供することになる。

以上の問題意識に基づいて、地方史人名録地誌部分の記述内容と形式を分析した結果、次の3点が明らかになった。

(1) 地方史人名録の地誌部分は、広く知られたハディースと、地域を越えて共通した枠組み・内容の伝承を材料として、(2) 地域の由緒をイスラーム的世界史とすりあわせて語り、ムスリム共通の宗教的価値観に照らして美質を描く。(3) 以上の内容は、同内容で伝承経路が異なる複数のハディース・伝承を反復する形式で語られる。この形式は、

多数の伝承経路で広く伝えられたものを正真とする、ハディース学の正真性判定理論に則って形成されたものであった。

こうした内容と形式は、地方史人名録が、イスラーム世界という全体を強く意識して編纂されたことを意味する。各地で編纂された地方史人名録が類似したことの理由は、ハディース・伝承という共通の材料を、ハディース学という共通の枠組みに則って利用したこと共に、イスラーム世界という世界観が各地のウラマーに浸透したことにあったのである。

## 2. 初期十字軍時代におけるシリアの小都市

中村 妙子

セルジューク朝の宗主権が衰えた 12 世紀前半のシリアには、北部のアレッポや南部のダマスカスのように周辺地域をも併せて支配していた大都市のほか、数々の小都市が混在し、名目的にはアッバース朝カリフやセルジューク朝スルタンに従いながらも、実際の統治はそれぞれが行なっていた。シリアに侵攻した十字軍勢力は、戦闘を行なう一方で、分立する大小のシリア諸都市との間に多数の経済協定や軍事同盟を締結し、シリアに勢力均衡構図が生成されていった。この中で、十字軍と独自に交渉を行なっていた 4 つの小都市——アミールが政権をとっていたシリア北部のアザーズとマンビジュ、アラブ領主が政権を握っていたシリア中部のシャイザルと、ユーフラテス川沿いのカルアト・ジャウバル——には、経済協定や軍事同盟の締結の他に、協定や捕虜釈放の仲介役をつとめるものもあり、両勢力間には人的交流が存在した。シリアの勢力均衡構図の中で、これらの外交交渉が存在すること自体がシリア大都市の強盛化を防ぐことになり、その結果、シリア小都市は緩衝地帯の役割を果たしていたのである。

ところが、522/1128 年にアレッポに政権を確立したザンギーのシリア南進策開始とほぼ時を同じくして、これらの小都市と十字軍との外交交渉が見られなくなった。最大の背景は十字軍勢力の世代交替である。これまでシリアの勢力均衡構図の中で、キャスティングボートを握ってきた小都市が存立基盤を失うことになり、ザンギーに従わざるをえなくなった。しかし、勢力均衡構図の中でつちかかってきた自前の統治システムや軍事力をもつこれらの小都市の存在は、ザンギーにとって利用価値のあるものであった。ザンギーはこれ以後、これらの小都市を南進策の拠点として用いたのである。しかも一挙に支配下に入れるのではなく、自身の戦略にあわせて順次とりこんでいった。機動力のある軍隊をもつマンビジュは当初から、シャイザルはシリア中部の十字軍領攻略の時期にあわせて、それぞれ従わせ、カルアト・ジャウバルはジャジーラ地方の政局が転換するまで緩衝地帯としてそのまま温存していた。十字軍支配下にはいっていたアザーズに対しては、農業地の確保という観点から、十字軍からの奪回や略奪を行なわなかった。ザンギーは、勢力均衡構図の中で独立していた小都市をシリア南進策の拠点として用いたが、戦略上の適切な時期が来るまでは緩衝地帯として温存したのである。

## 3. 『メルヴ史』 解題 — 12 世紀以前のものを中心に

西村 淳一

『メルヴ史 (ターリーフ・マルウ)』とは、7 世紀のアラブ・ムスリム軍による征服以降のホラーサーン地方、その北東部のメルヴ地域—都市メルヴとその周辺の小都市・村落によって形成される地域—の歴史を主題とした地方史文献である。単独の著者による一作品ではなく、同一主題を扱った数種類の作品群の総称である。作品群中の大半はおそらくアラビア語で書か

れていた。『メルヴの (ための) 歴史 (ターリーフ・リ・マルウ)』、『メルヴの人々の歴史 (ターリーフ・アフル・マルウ)』、『メルヴの人々の歴史 (ターリーフ・アルマラーウィザ)』などと呼ばれることもあった。

周知のごとく、前近代のイスラーム世界では地方史文献が数多く書き残され、イスラーム史研究の貴重な一次史料として古くから研究者に活用されている。当該の『メルヴ史』も、もし現存していれば、初期イスラーム史上のメルヴの重要性から考えて、極めて有益な史料であったに違いない。しかし残念ながら、それらは長い時間を経て全て散逸してしまったようである。

この『メルヴ史』作品群については、セズギン (Sezgin, F.)、ローゼンタール (Rosenthal, F.)、カマーリッディーノフ (Kamaliddinov, Sh.S.)、佐藤明美といった研究者らの先行研究から少なくとも 7 種類存在したことがわかってきた。しかしこれら先行研究の情報は作品群の全体像を見据えて論じられたものではなく明らかに検討不足であっ

た。また『メルヴ史』の記述内容に踏み込んで検討した専著、専論も知見の限り存在しない。そこで本発表では、この作品群に関する文献学上の基礎データを提供すべく、史資料中に見られる『メルヴ史』に関わる記述を網羅的に採取し、それらを口頭および配布資料により提示した。

本発表の結果、『メルヴ史』は少なくとも1種類（準『メルヴ史』を含めれば13種類）存在したことが明らかとなった。この数は他の特定の地域を扱った地方史文献の数と比較して明らかに多い。メルヴはこのような地方史文献の執筆が比較的盛んに行われた地域であったと指摘できる。また本発表では諸史料中に残された『メルヴ史』の逸文についても検討し、『メルヴ史』の多くが人名録を掲載した所謂「地方史人名録」であった可能性を指摘した。今後、これらの逸文をさらに調査、検討することにより、より厳密なメルヴ地域の歴史研究が可能である。

#### 4. マムルーク朝時代のナイル地理書：史料としてのファダーイル

吉村武典

マムルーク朝以前から、ナイル川およびその流域であるエジプト地域に関して、その地理的特徴、ナイル灌漑農業によるエジプトの豊かさについて触れた著作物は、それを一つの作品として書かれたものや、一部で取り扱っているものを含めて多数存在する。今回の報告では、マムルーク朝時代の14、15世紀に記された4つのナイル川に関するファダーイルの書を中心に取り上げ分析を加えた。これらのファダーイルの書は浩瀚なものから小作までを含め共通する著述形式を備えているものが多い。今回はそれらの作品群をまとめて「ナイル地理書」として取り扱った。

今回の報告では、シハーブ・アッディーン・アル=マヌフィー（d. 931/1524）『幸福なるナイルにおける長大なる氾濫』、シラージュ・アッディーン・アル=ブルキーニー（d. 791/1389）『増水するナイルにける調査の達成』、シハーブ・アッディーン・アル=アクファフシー（d. 808/1406）『ナイル録』、ジャラルール・アッディーン・アル=マハッリー（d. 864/1459）『記録におけるナイルの始まり』の4作品を取り上げた。以上の作品のうち、マヌフィーの作品は序文によればザイヌ・アッディーン・ラシーディー（d. 803/1400）の作品を底本としたものである。これらの14世紀末から15世紀後半にかけて記された「ナイル地理書」の著者は、シラージュ・アッディーン・アル=ブルキーニーやジャラルール・アッディーン・アル=マハッリーをはじめ当時の著名なウラマーであるだけでなく、学問上でも師弟関係や兄弟弟子関係にあることが知られている。

それぞれの「ナイル地理書」では各章立てや内容構成、引用の内容に類似性がうかがえた。また、コーランやハディースからの引用のほか、ナイル川の水源地から流域の景観、流域の区分といった地理的情報に加え、ナイル川の増水と農業生産の関係、コプト農事暦とエジプトの農業四旬期の区分などのエジプト特有の情報が「ナイル地理書」には共通して含まれており、これらの行政的な知識も当時のウラマーをはじめとする知識人が所有していたことがうかがえた。そのほか、具体的な引用の典拠を観察すると、マムルーク朝時代以前のイブン・ズーラク、キンディー、マスウディーらの古典的なファダーイルからの引用のほか、比較的時代の近いイブン・カスィールやイブン・マンマーティー、マムルーク朝時代のヌワイリーからの引用も見られ、ファダーイルだけではなく、歴史書や政治手引書など幅広く情報を収集してこれら「ナイル地理書」の著述が行われたと考えられる。

#### 5. 15世紀初頭のオスマン朝における歴史観—アフメディーの『イスケンデル・ナーメ』を中心として

山下 真吾

本発表では、14世紀後半から15世紀初頭にかけて活躍したアナトリアの詩人であるアフメディーによってトルコ語で著された『イスケンデル・ナーメ』を中心として、15世紀初頭のオスマン朝においてどのような歴史観が見られたのかを分析する。

『イスケンデル・ナーメ』は、アレクサンドロス大王の事蹟を主題とし東西に広く流布していたアレクサンドロス物語を下敷きにして著された。そしてアフメディーによって、15世紀初頭のオスマン朝の分裂時代に一時ルメリを支配したスレイマン・チェレビーに献呈されたと言われている。またその内容においては、アレクサンドロス大王の事蹟と共に、ケユーメルスからオスマン朝のスレイマン・チェレビーにまで至る諸王朝史が含まれている。

この諸王朝史のオスマン朝の部分は、現存するオスマン朝史では最古の部類に属するため、歴史研究者によって重視されてきた。しかし従来の歴史研究においては、オスマン朝史の部分が単独で分析対象となり、『イスケンデル・

ナーメ』という作品全体と、諸王朝史やオスマン朝史の部分との関係という観点からの分析は充分に行われてこなかった。本発表では、『イスケンデル・ナーメ』の作品中に見られるアフメディーの主張と彼の歴史観との関係を示し、その上でアフメディーがどのような歴史観に基づいてオスマン朝の歴史を評価したのかを明らかにする。

アフメディーは、『イスケンデル・ナーメ』において、公正などの概念を用いて、君主はそうした徳を身につけるべきであるという主張を行い、諸王朝史ではその主張に基づいて諸君主を評価した。そしてアフメディーの主張する徳を身につけていた君主は繁栄し、そうした徳を持たずアフメディーの主張に反する事を行った君主は没落したとして諸王の事跡を記している。

そしてアフメディーは、オスマン朝の諸君主をあらゆる徳を身につけた理想的な支配者として描く一方、バヤズィット I 世については、公正で敬虔であったが自身の好運に惑わされて没落した君主であるとして描いた。N・S・バナールとヒース・ローリーはこの記述にアフメディーのバヤズィット批判が含まれていると指摘したが、アフメディーの表現は極めて曖昧であり、批判は明示的なものとはいえない。

## 6. タンズィマート改革初期におけるオスマン帝国の政策決定過程

秋葉 淳

1839年に始まるオスマン帝国のタンズィマート改革は、一般に典型的な「上からの改革」と見なされている。しかし、具体的な政策、制度、法令などがどのようなプロセスを経て決定されたのかについては、必ずしも詳細に明らかにされていない。そのため、それらが成立した理由やその意図について十分な理解が得られているとは言いがたい。そこで、本報告では1839年に始まるタンズィマート改革の初期における政策の修正あるいは変更の決定過程を採り上げる。改革初期の最大の課題は、徴税請負制の廃止とそれに伴う地方行政・税制の再編であった。しかし、急進的な変革は各地の反乱や税収の低下などを招いて機能不全に陥り、1842年2月には徴税請負制度が復活した。本報告はとくに、初期改革の行き詰まりが見えた1841年にオスマン政府において議論されていた二つの問題に焦点をあてる。一つは、改革によって1840年からイスラーム法官に支給されていた給与の廃止の件であり、もう一つは、徴税官管区内の中心郡以外の各郡に設置された「小評議会」の存廃をめぐる問題である。これらについては総理府オスマン文書館に比較的詳しい資料が残っているため、意思決定がどのような段階を経て行われたのかを追うことができるのである。

オスマン文書の精査から、例えば、イスラーム法官の給与廃止には、手数料収入という旧来の権益保護よりもむしろ、法官任命権の確保を図るシェイヒュルイスラームの意向が強く反映されていたことや、小評議会は従来言われているように廃止されたわけではないことなどが明らかになる。当時の政府にとって財政支出削減が最優先課題であり、上記の二案件もそのための方策であった。それらは比較的長い時間をかけて検討され、その過程で当初の案が変更されることもあった。意思決定は、関係部局間のやりとりと最高評議会及び総評議会での討議を通じて行なわれるが、小評議会の問題の場合のように、各地の地方官たちの意見を積極的に集めることもあった。小評議会廃止案の撤回に至る過程では、地方からの提言が大きな影響を及ぼしていた。改革は試行錯誤の連続であり、一部のグループによって独断的に決められていたわけではなかった。このように、政策決定過程を明らかにすることは、個々の政策を適切な脈絡の中に位置づけることを可能にするのであり、本研究は、タンズィマート改革の再検討の足がかりの一つになりうるものである。

## 7. 海運史料にみる近代オスマン社会の変容—オスマン帝国末期の海運と黒海沿岸民

小松 香織

本報告は、オスマン帝国の官営汽船「特別局」の『給与台帳』により汽船運航に従事した人々の出自を明らかにし、そこからオスマン帝国末期の社会変容の一端を垣間見ようとしたものである。『給与台帳』とは事務職員、波止場の陸上職員、汽船の乗組員等に対する給与支払いの帳簿である。最も古い第1巻は財務歴1291年度(西暦1875/76)のもので、特別局がオスマン海運局に改名・再編される1910年9月までの総巻数は129冊である。本報告では時代の変化も考慮しつつ汽船の乗組員に関するものを29冊選び出した。そして各々について汽船名、乗組員の定員数、のべ就労人数、職種、乗組員名、出身地、給与、勤務年数、異動等のデータを収集し、乗組員の出身地域、ムスリム・非

ムスリムの別、外国人、軍人の数および全体に占める割合を台帳ごとに集計し分析を行なった。

時期的な変動はあるものの、アブデュルハミト 2 世(在 1876-1909)時代官営汽船の乗組員の約半数を黒海沿岸 2 州出身者が占めていることがわかった。このことは、伝統的に海運活動の主役であったルーム(ギリシア系臣民)の人材をギリシアの独立によって大量に喪失したオスマン帝国が、ムスリム臣民によってこの空白を埋めざるをえなくなった時、重要な役割を果たしたのが黒海沿岸地域の人々であったことを示している。この地方は古くから黒海交易の幹線ルート上の主要港を抱えると同時に、エーゲ海、地中海とは比べものにならないほど厳しい自然環境にある黒海で漁船を操り生計を立ててきた多くのムスリム漁民が存在した。また造船を通して伝統的に海軍とのつながりも深かった。こうした歴史的背景からルームに代わる人材を供給するムスリムの人的資源が豊富にあったと考えられる。また、外国人、非ムスリムの急激な減少からはアブデュルハミト 2 世の対外政策との関連性やオスマン社会のムスリム・トルコ化現象がみて取れる。

オスマン帝国はその末期、特に海洋活動において、前近代に見られた「地中海性」の喪失とアナトリア沿岸地域、特に黒海沿岸地域の比重の増加とが顕著であった。その意味で、19 世紀から 20 世紀初頭に、「地中海世界帝国」としてのオスマン帝国から「アナトリア・黒海領域国家」としてのトルコ共和国への約 1 世紀間におよぶ長い変化のプロセスと両者の連続性を見出すことができるのである。

## 8. 19 世紀イスタンブルにおけるアルメニア文字のトルコ語定期刊行物 上野雅由樹

タンズィマート期のオスマン帝国では、アルメニア人の間でも民族意識の高揚が見られた。これは特にアルメニア語への関心という形をとることになる。しかしこのような動きと平行して、出版メディアの普及により、アルメニア文字を用いてトルコ語を記すという表現方式も広く見られるようになった。本発表では、アルメニア文字のトルコ語新聞を刊行した人物の代表格であるガラベド・パノシアンに焦点をあて、タンズィマート期の文脈において、アルメニア文字のトルコ語という表現方式が持った意義を検討した。

パノシアンは、アルメニア民族意識の重要性を伝えるために、アルメニア文字のトルコ語という表現手段を用いる必要があったと考えられる。一方ではカトリックによるアルメニア文字のトルコ語使用という問題が存在した。当時アルメニア・カトリックは、アルメニア文字のトルコ語定期刊行物を用いて情報を発信していた。アルメニア教会の信徒であるパノシアンは、アルメニア人のカトリック改宗を、民族性喪失の危機として問題視していた。彼にとっては、アルメニア教会の信徒でありながらトルコ語のみを解するアルメニア人が、カトリックの側から発信される情報に向かうことを阻止するために、代替物を用意する必要があったのである。

他方でパノシアンは、アルメニア人を啓蒙することに最大の関心を置いていた。そして彼が啓蒙の対象とすべきと考えたのは、民族性喪失の危険度が高いと彼が判断した、アルメニア語を解さず日常的にトルコ語を用いるアルメニア人だったのである。パノシアンは、アルメニア文字のトルコ語で出版活動を行っていたからといって、必ずしもアルメニア人がアルメニア語を身につけずにトルコ語のみを用いることを容認していたわけではなかった。むしろ全てのアルメニア人がアルメニア語を理解するようになるという展望を描いていた。しかしパノシアンは、それまでの過渡期において、アルメニア語を身につけることの重要性を理解させるということも含めて、アルメニア語を解さないアルメニア人を啓蒙する必要があったのである。このように、アルメニア文字のトルコ語という表現方式も、民族意識の高まりが見られた 19 世紀には、アルメニア民族意識と結びつけられて利用されていたのである。

## 9. 後期サファヴィー朝とクルド系諸侯 山口 昭彦

200 年あまりに及ぶサファヴィー朝の歴史は、一般に、アッバース 1 世の治世に最盛期を迎え、その後は衰退したと言われてきた。しかし、近年では、アッバース後 100 年にわたって王朝が存続しえた事実に着目し、かかる安定をもたらした要因の解明へと関心が移行している。

本報告では、これまでもっぱら「中央」からの視点で検証されてきた後期サファヴィー朝の支配様式の変容を「周縁」から考えるための一素材として、オスマン朝との境界地域に割拠していたクルド系諸部族とサファヴィー朝権力との関係がこの時期どのような変化を見せたか、またそのことが地域社会にどのような影響を与えたかを検討した。

報告者は既発表論文において、サファヴィー朝前期、とりわけタフマースブの対クルド政策について論じた。そこでは、世襲の所領を維持すべくオスマン朝とサファヴィー朝との間で巧みに臣従の対象を変更したクルド系諸侯に対し、タフマースブが領地や部族に対する彼らの世襲的支配権を認め、子弟の宮廷での養育や王の側近としての登用などを通じて彼らを王朝の支配体制のなかに緩やかに組み入れようとしたことなどを明らかにした。とはいえ、タフマースブ死後の国内の政治的混乱とオスマン朝との紛争が再びクルド系諸侯とサファヴィー朝との関係を動揺させることとなった。

以上を踏まえ、本報告では、1639年にサファヴィー朝とオスマン朝との間で結ばれたゾハーブ条約が両王朝の和平をもたらしたのみならず、この条約を機に最終的にサファヴィー朝に組み込まれたクルド系諸部族と王朝との関係や、地域社会のあり方にも大きな影響を与えたことを指摘した。すなわち、一方では、後期サファヴィー朝もまた、クルド系諸侯の世襲的支配権を認めたが、ゾハーブ条約後は、彼らが代々継承してきた知事職への介入を強めるなど、中央からの統制をより強化することを促した。他方で、王朝権力による集権化や経済振興政策を受けて、17世紀半ば以降、クルド系諸侯はこぞって拠点となる都市を交易路上に建設し、市場、隊商宿、橋梁など社会資本を積極的に整備していった。こうしてクルド地域各地がサファヴィー朝国内やオスマン朝との交易ネットワークと一体化したことがもたらす経済的繁栄もまた、クルド系諸侯のサファヴィー朝支配に対する持続的服従に大きく寄与したと考えられるのである。

## 10. イギリス占領下エジプトにおける刑事政策の展開—1883-1903年間の刑法改正を中心に

勝沼 聡

19世紀末、エジプトでは近代西洋の法体系が導入され、フランス刑法を範とした新たな刑法、1883年刑法が制定された。しかし、ほぼ同時期にエジプト占領を開始したイギリスは、自らの意向とは関係なく導入されたこの刑法に対し、改正の必要性を強く認識していたとされる。1890年代以降、法務省内での実権を掌握したイギリスは、刑法の改正に着手するが、その一連の刑法改正が示す刑事政策の方向性を明らかにすることが本発表の目的である。なお、今回の発表では、1883年刑法下の90年代の刑法改正に焦点をあてるため、全面的改正が行なわれ、新たな刑法が制定される1904年以降は検討の対象から除外した。

当時のあらゆる法案は、占領下の1883年に設置された立法諮問会議で審議されなければならないとされており、刑法改正案の検討にあたっては、同議会の議事録が重要な史料として位置づけられる。その議事録中に現れる、90年代に提出された刑法改正案を検討した結果、主に他者の身体あるいは財産に対し危害を加える犯罪行為に関する規定と、監獄内での受刑者処遇に関わる規定が改正の対象となっていたことが明らかとなった。

特に後者の受刑者処遇に関する改正は、1883年刑法制定時の規定では監獄内での労働への参加が義務となっていない禁固刑受刑者に対し、労働への参加を義務付ける改正が含まれている。これは同時期に制定された、浮浪民に対する規制法に定められた罰則に対応し、禁固刑が相当であるとされた「浮浪」の罪を犯した罪人たちを労働への参加を通じて矯正しようとする当局の意図が反映されていたと考えることができる。また、当時浮浪民の存在は、上記のような種類の犯罪の増加の背景として、当局から危険視されていた。

以上のような検討の結果、これら一連の刑法改正は、浮浪民に対する規制と関連付けて論じられるべきものであることが明らかになった。現実には、過剰収容による監獄内の環境悪化やそれを解消するための方策として当時恒常化していた恩赦の実施によって、当時のイギリスの政策は実効性を伴うものではなかったが、浮浪民を社会から隔離・再教育によって犯罪を抑止することが、当時の刑事政策の中心的課題であったことは指摘できる。

## ポスターセッション

### 1. 口語アラビア語で書かれた新聞記事

榮谷 温子

本発表では、エジプトのドストール新聞の、エジプト方言で書かれた記事について報告した。アラビア語は従来ギリシア語とともに、ダイグロシアの例とされてきたが、現在は二言語併用という図式ではなく、アラビア語を口語から正則語にいたる連続体として捉える「言語レベル論」という考え方が主流だ。これを提唱したBadawiは、この連

続体を大きく5レベルに分け、それぞれのレベルの機能や特徴をまとめている。その5レベルとは、1) 遺産的な正則アラビア語、2) 現代の正則アラビア語、3) 教養人の口語アラビア語、4) 識字者の口語アラビア語、5) 非識字者の口語アラビア語、で、それぞれ正則語的要素及び口語的要素という主要要素と、外来語の割合という副次的要素によって特徴付けられる。

この時点では、3～5のレベルのアラビア語は、それぞれ異なる特徴を持っていることが認識されていたとは言え、いずれも話されるアラビア語として捉えられていた。書かれるとしても、漫画の台詞等限られた場面のみ想定されており、教養人レベルのアラビア語が活字になるという現象は想定されていなかった。この意味で、口語アラビア語で書かれた新聞記事は、これまでのアラビア語の枠組みの見直しを迫るものであるといえる。

本発表では、文字からでも正則語的か口語的かの区別が容易な語彙から、見出しや記事の言語レベルを判断し、どのような分野の記事で口語的レベルが用いられているか、それがどのように用いられているかを分析した。

まず、口語的レベルのアラビア語は、政治・経済・宗教系の記事より、社会や娯楽の記事に多く見られた。しかし、記事全文が口語レベルで書かれていることはなく、正則語的レベルで書き始め途中で口語的レベルの語彙等に移行する、あるいはその逆など、記事の中で正則語的レベルと口語的レベルが混在する。また、地の文を正則語的レベルで、会話部分を口語的レベルで書いて臨場感を出す手法も使われる。

今後の課題としては、

- 1) 口語的レベルで書かれた記事が意外に少なく、さらに多くの記事収集の必要がある。
  - 2) 正則語レベルと口語的レベルの混在する記事を分析、コードスイッチが如何に行なわれているか規則性を見出す。
  - 3) 現地カイロにて、実際に記事を執筆する記者に、言語レベルの使い分けに関してインタビュー調査を行なう。
- の3点が挙げられる。

## 2. UET 7, 62, 68に見られるアクル (AK-LU<sub>4</sub>) について

村井 伸彰

アクルという用語はカッシート王朝期のニップルとウルでしか確認されていない。この用語は食べ物（ビール、大麦、等）の支出を表しているけれども、どのような用途の支出なのかは不明なままである。これまでアクルは以下のように解釈されてきた。

バルカン K. Balkan (1945-1951)	:	“Verpflegungsrationen an Höhergestellte”
CAD (1964)	:	“expenditure(?)”
ペチョウ H. Petschow (1974)	:	“Ausgabe, Verbrauch”
デル・モンテ G. Del Monte (1994)	:	“consume”
デーゼル D. Deheselle (1996)	:	“distribution officielle de biens d'origine agricole ou pastorale à des individus ou des collectivités pour des usages alimentaires et pratiques non liés à l'exercice d'une profession.”

最近、デーゼルはニップルの史料を用いて、アクルの意味を明らかにしようと試みた。デーゼルに従うと、アクルは行政から受領者への一方通行の支出である。(L'*aklu* se fait à sens unique, au départ de l'administration vers un bénéficiaire, sous la responsabilité de fonctionnaires patentés)

デーゼルは行政以降のアクルを論じている。他方、発表者はウルの史料 (UET 7, 62, 68) を用いて、アクルが行政に渡るまでの流通を考える。これらの文書 (UET 7, 62, 68) はシン神のビール醸造者家族の文書庫から出土しており、ここでビール醸造者はアクルの受領者ではなく、供給者のようである。ビール醸造者がアクルの供給に携わっていたことはニップルから多数確認されるビールのアクルからも窺える。つまり、アクルはビール醸造者等の職人によって

行政に供給され、さらに行政から受領者に分配されたのだろう。

### 3. 北西シリア、テル・エル・ケルク 1号丘の発掘調査

常木 晃・西山伸一・長谷川教章

エル・ルージュ盆地南部に位置するテル・エル・ケルク遺跡での発掘調査は、1997年から、シリア考古博物館総局（団長：ジャマル・ハイダール）と筑波大学シリア考古学調査団（団長：常木晃）との合同調査として開始された。

テル・エル・ケルク 1号丘（以下ケルク 1号丘）は、テル・エル・ケルク遺跡を構成する最大規模の遺丘である。本調査団は、2007年からケルク 1号丘の本格的な発掘調査を開始した。本発表はこの調査の成果報告である。

本調査の主目的は、ケルク 1号丘において①青銅器時代および鉄器時代の居住遺構の把握と②基本層序の把握、以上の2点である。目的①に対して南西斜面に第1発掘区を、目的②に対して平坦部南縁辺部に第2発掘区を設定した。

第1発掘区では、現在少なくとも4つの文化層を確認している。それは、鉄器時代 II 期、後期青銅器時代、中期青銅器時代、前期青銅器時代 IVb 期である。まず表土下 30cm ほどで、北西方向を軸とし平行してならぶ2列の石壁を検出した。建築材の間からは、鉄器時代 II 期に特徴的なレッド・スリップ土器等が出土し、当該遺構は鉄器時代 II 期に帰属する。後期青銅器時代の層位は、遺構の遺存状態が極めて悪い。現時点では、崩れたレンガ壁などを部分的に検出している。しかし、後期青銅器時代の指標となるミケーネ土器のスティアラップ・ジャーの破片が出土しており、その点を重視したい。アンサリエ山脈以東でのミケーネ土器の出土例は極めて少なく、当該資料の発見は重要である。中期青銅器時代の層では、複数の居住遺構群と共に幼児を埋葬した甕棺を検出した。人骨の周辺からは、布片が多数出土している。前期青銅器時代の層では、プラスター床を検出し、その直上からは前期青銅器時代 IVb 期に特徴的なゴブレットが出土した。

第2発掘区では4つの文化層を確認した。それは、ローマ・ビザンツ時代(第1層)、ヘレニズム時代(第2-3層)、鉄器時代から中期青銅器時代(第4層)、前期青銅器時代 III 期(第5-6層)である。第2-3層では、ヘレニズム時代に特徴的なメガロン土器が出土した。第5-6層では、ヒルバット・ケラク土器や、リザーブ・スリップ土器など前期青銅器時代 III 期の指標となる土器が出土した。

最後に、北西シリアでは、中期から後期青銅器時代にかけての在地土器の編年研究が十分に整備されていない。本調査で後期青銅器時代の在地土器を抽出することができれば、後期青銅器時代の編年の研究に貢献できる可能性を秘めている。

### 4. 3D モデリング応用一例

平敷 イネ

本ポスター発表では、GIS (地理情報システム) ArcGIS9.2 システムを使用して作成した図を 3D ソフト、Autodesk 3ds Max7 と組み合わせ架空のモデルを構築し 3次元モデリング応用一例として紹介した。本 2製品を選択した理由は、広く流通していること、両製品の互換性が良く、通常このような3次元モデリングには GIS と CAD の間に更にもうひとつプログラムを挟む場合が多いが、両製品間ではその必要がなく利便性に長けることである。

引用になるが、GIS とは地理的位置を手がかりに、位置に関する情報を持ったデータ (空間データ) を総合的に管理・加工し、視覚的に表示し、高度な分析や迅速な判断を可能にする技術である (国土地理院) とある。GIS は単なるプレゼンテーションソフトではなく、分析能力に優れており、既に多様な分野で導入されているが、今回は 3次元モデリングと組み合わせた一例として、丘上に城砦が残っており、遺構の歴史的背景の説明及び出土品の展示の為に城砦に近接した博物館を建築しようとした場合を想定した。集落にあるホテルからは現在城砦が眺望できるが、新たな建造物により眺望が阻害される可能性があり、また建築予定地地中に建築遺構が埋没している場合が考えられる。ViewShed を使い、ホテルの 5階付近から丘を眺めるように高さを調節して可視領域を求めた。別個にデータが必要になるが、地中に埋没している遺構を破壊しないことを表示した例を挙げた。

さらに DXF、DWG データを用い、3ds Max7 で博物館としたい建築物や、集落から続く回廊などを作成する。建物の表面や風景に煉瓦を表現するテクスチャや、湖に映る空模様などを選択して貼り付け、より実世界に近い景観を作り出すことができる。又、紙媒体での発表のため今回は割愛したが、ビデオを埋め込むことも可能であり、集落か

ら城砦まで博物館を通り丘を見下ろしながら一周する経路で空間を通り抜ける様子を録画した。

座標系の概念を理解し、システム機能や特性を生かした（個別に使用されることも多い）GIS と CAD の応用・活用は、専門分野での導入目的を明確にする必要があると考える。今回は両方を組み合わせることにより、3次元までの世界を紹介したが、今後は時の変遷を可視化できるような4次元の検討が課題である。

## 5. シリア、テル・アイン・エル・ケルク遺跡東トレンチの調査 小高 敬寛

テル・アイン・エル・ケルク遺跡はシリア・アラブ共和国北西部ルージュ盆地に位置し、西アジア最大級の新石器時代集落であったテル・エル・ケルク遺跡を構成する一遺丘である。1997年からシリア文化財博物館総局（調査団長：J. ハイダール）と筑波大学シリア考古学調査団（同：常木晃）が合同で発掘調査を実施している。2002年までの第1期調査では、遺丘の裾部に設けた北西区において地山直上よりルージュ1期（先土器新石器時代B期）から2b期（土器新石器時代前葉）までの堆積を確認するとともに、遺丘頂部の中央区においてルージュ2c期（土器新石器時代中葉）から2d期（同後葉）までの資料を得た。しかし、本遺跡のほかルージュ盆地内で試掘調査を行なった数遺跡でも、新石器時代の連続した層序は部分的に未検出のまま残されていた。

そこで、第2期調査を開始した2005年、遺丘全体の層序の把握とルージュ盆地における新石器時代編年の補完を目的として、新たな調査区を設定した。東トレンチと名づけられたこの調査区では、2008年まで4次にわたる発掘を実施した。

調査の結果、第1層から第9層までにいたる連続した新石器時代の層序を確認できた。いずれの層においても、遺構は建物基礎に使われた石列が中心であった。

第1層～第3層はルージュ2d期に相当し、東方由来のハラフ成立期土器などがみつかった。第4層～第6層はルージュ2c期の堆積であり、石列のほか礫敷を伴うプラスター床を幾重も検出した。第7層と第8層はルージュ2b期に帰属し、石列や炉などの遺構の合間からは西アジア最古級の土器である「ケルク土器」が出土した。第9層は土器がみられず、ルージュ1期に位置づけられる。ルージュ1期から2d期までの資料が得られたことにより、北西区の成果と併せて、テル・アイン・エル・ケルク全体の編年的な情報はほぼ出揃ったといえる。

また、第9層でみつかった遺存状態のよい焼失建物は、ほとんどの部屋に貯蔵用のビンが所狭しと並べられていたことから倉庫とみられ、新石器時代の巨大集落における物資管理機構を考えるうえで貴重な発見となった。

今後は、出土土器の検討と測定中の放射性炭素年代をもとにして精細な編年を構築するとともに、焼失建物を中心とした遺構の詳細な分析を進めていく予定である。

## 6. スーダン・クシュ王国の遺産 坂本 麻紀

エジプトの古代遺跡は日本でも有名であるが、エジプトの南に位置し、ナイル川をエジプトと共有するスーダン共和国にも「ピラミッド」に代表されるようなエジプトと深い関わりを持つ古代遺跡が多く存在するという事は、それほど知られていない。

現在のエジプト南部の都市アスワンの南からスーダンの首都カルトゥーム辺りまでは研究者によってヌビアと呼ばれる地域であり、古代エジプトにとってエジプトとアフリカの南の地域をつなぐ交易の中継地点という役割と、金や銅などの天然資源を産する地域として大変重要であった。そのためヌビアはたびたびエジプトから支配を受けることとなるが、紀元前11世紀頃にエジプトの中央集権制が崩壊し、外国人を含む並立する複数の王がエジプトを支配する第3中間期と呼ばれる時代に入ると、上ヌビアのナイル川第4急流のナパタ地域で興った土着のクシュ王国が独自の発展を遂げ、紀元前8世紀にはクシュ王ピイが分裂していたエジプトを統一し、エジプト王として第25王朝（クシュ朝）を成立させるなど、ヌビアは支配される側から支配する側となる。

クシュ王ピイが成立させたエジプトの第25王朝は100年に満たない短命な王朝ではあったが、クシュ王たちはエジプト王として当時敵対していた強国アッシリアと戦い、エジプト国内で立場が弱まっていたアメン神を国家神として復活させるなどさまざまな活動を行った。また、エジプト国内だけでなくヌビアの地でもエジプトの神々の神殿を建立し、エジプトの真正ピラミッドとは異なる傾斜角度が急勾配なピラミッドをナパタ地域のクシュの王墓地に新た

に導入するなど、ヌビア文化とエジプト文化の要素を結合した新しい埋葬様式を生み出した。第 25 王朝が崩壊し、クシュ王たちがエジプトから撤退した後も、クシュの王墓地に導入されたピラミッドは継続して造られ、王墓地が紀元前 3 世紀にナパタ地域からナイル川第 5～6 急湍のメロエに移った後も、紀元後 4 世紀まで王墓として継続して造られている。

このようにスーダンにはエジプトと深い関わりを持つクシュ王国の遺跡が多く存在するが、入国や現地での滞在、遺跡見学に関してさまざまな制限等があることから、現在でも個人では気軽に訪れることができない。しかしながら、多くの方々のご協力により、2007 年 9 月 6～18 日に私はクシュ王国にとって重要な遺跡が多く点在するナパタ地域とメロエ地域の遺跡を見学する機会を得た。

今回はその中でクシュ王たちが聖なる山として崇めたジェベル・バルカルと、ナパタ地域のクシュの王墓地エル＝クツルとヌリ、そしてメロエ地域のクシュの王墓地であるメロエと、スーダンで最も保存状態が良いと言われているメロエ時代の神殿があるナカ遺跡についての紹介を行う。

## 7. シリア・ビシュリ山系、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の発掘調査

長谷川敦章・木内智康

シリア・アラブ共和国の北東部、ユーフラテス河中流域の南側に位置するビシュリ山系は、初期王朝時代よりセム系のアムル人の故地として粘土版文書に記されるなど、注目されてきた地域である。このビシュリ山系をフィールドに、「セム系部族社会」が形成された経緯を明らかにする総合的研究プロジェクトが 2005 年度より発足した（文部科学省科学研究費補助金 平成 17 年度発足特定研究「セム系部族社会の形成：ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」領域代表者：国土館大学教授 大沼克彦）。本プロジェクトでは、自然・人文両科学の多彩な分野の連携を通じて「部族性」をキーワードに総合的研究を行っている。本発表は、現地調査の一環として実施したテル・ガーネム・アル・アリ遺跡発掘の調査概報である。

テル・ガーネム・アル・アリ遺跡は、ラッカ市から東に約 50km、ユーフラテス河南岸の微高地上に立地した単独のテルである。注目すべき特徴は、テル頂上平坦面の縁辺から斜面中腹にかけて、直線や L 字、コの字形を呈する建築遺構の基礎が部分的に露出している点である。これらは石膏を利用した石列であることが多く、ほぼ全域に広く分布している。

発掘調査では、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の基本層序の把握、地表面観察で確認した建築遺構の帰属時期とその構造の解明、以上 2 点を主目的とし、5 つの発掘区を設けた。第 1 発掘区は、コの字状に露出している建築遺構を含んで設定した。この発掘区の遺構は、ほぼ全てが南北軸に沿っており、前期青銅器時代 III 期に帰属する可能性が高い。また比較的短期間のうちに、壁の一部を再利用し小規模な建替えがあったことも確認できた。

第 2 発掘区では、少なくとも 4 つの建築層を確認した。第 1 層から第 3 層までは、南北軸に沿った遺構が検出されている。しかし第 4 層では、北西・南東方向に伸びる、幅約 2m の石列を検出している。これは周壁の一部の可能性がある。第 2 発掘区の第 1 層から 4 層は前期青銅器時代 III 期から IVA 期前半に相当する。さらに、第 3 発掘区からは、複数枚貼られた石膏プラスターの厚い床面を検出した。またこの発掘区周辺では、表土直下にいくつものパン焼き窯を発見した。第 1 発掘区とは様相が異なり、極めて興味深い。さらに精査し、第 1 発掘区と比較検討することが急務である。

最後に共同発表者の一人であり、発掘調査の主要メンバーである木内智康氏が去る 2008 年 9 月に夭逝された。本調査においてなくてはならない人材であり、あまりに大きな喪失である。記してご冥福をお祈り申し上げます。

## 8. ユーフラテス川中流域の先史遺跡——2008 年春季踏査報告

西秋良宏・門脇誠二・久米正吾

シリア北部、ユーフラテス川中流域にあるガーネム・アル＝アリ、ハマディーン両遺跡における青銅器時代集落の調査が進行している（代表：国土館大学大沼克彦、ラッカ博物館アナス・ハブール）。どちらの遺跡も灌漑農耕が可能な河川低地と、現在は放牧・遊牧に利用されている乾燥台地との接点に位置する。この地勢的關係は青銅器時代に

あっても大きく異ならなかったと予想されるため、これらの遺跡調査は青銅器時代における農耕・放牧間の経済バランス、農耕民・遊牧民の社会関係などについて重要な情報を提供するものと期待されている。この調査の一環として、2008年3月から4月にかけてガーネム・アル＝アリ遺跡周辺で先史時代遺跡踏査を実施した。その概要について報告する。

踏査の目的は、周辺遺跡の年代や分布、性格を調べて、(1)当地に青銅器時代集落が営まれるにいたった歴史的背景、前史をさぐること、(2)青銅器時代の土地利用（セトルメントパターン）にかかわる知見を得ること、の二点である。

踏査範囲はガーネム・アル＝アリ遺跡から半径10キロ圏とし、今回は遺跡西側の段丘を中心に調べた。テルなど大形遺跡だけでなく小規模な居住痕跡も検出するために、徒歩による踏査を実施した。また踏査経路を詳細に記録し、遺跡として認められる地点、認められない地点を識別しながら、遺跡の時代鑑定、分布図作成をおこなった。

結果として、32地点で新たな遺跡を認定した。採集標本を分析したところ、先述の踏査目的にかかわる次の二つの所見を得た。

(1) ムステリアン、ケバラン、幾何学ケバラン、ナトゥーフリアンなど旧石器時代諸文化の遺跡は多数同定されたが、続く新石器時代の遺跡は僅少であり、確実な銅石器時代の遺跡は認定できなかった。一方、青銅器時代遺跡は豊富であった。

(2) 青銅器時代の遺跡には拠点集落、墓地、短期逗留地の三種が認められた。拠点集落は直近に墓地群を有しており、そのセットが大きなワディをはさんで数キロ間隔でならぶように見受けられた。仕事場（放牧地点？）と推定される短期逗留地は各所に散在していた。

これらの所見は、青銅器時代の土地利用パターンはかなり完成されたものであること、しかしながら、それは、それ以前の時代から連続的に形成されたものではないことを示唆している。この見通しは、未踏査地域の調査、採集標本の綿密な時代鑑定等をさらにすすめ、今後検証していく必要がある。

## 9. アコリス遺跡工房域発掘調査

花坂 哲

エジプト中部のナイル河東岸に位置するアコリス遺跡は、古王国時代からコプト時代に至るまで、前2400年から後7世紀までのおよそ3000年間に亘って連綿と人間の営みを確認できる遺跡である。2002年以降は、遺跡のランドマークとなっている岩山の南側斜面（南区）、および石灰岩丘が棚状に広がっている岩山西側の墓域（西区）の発掘調査が行われている。

南区では前11～4世紀頃、エジプトの時代区分で第3中間期から末期王朝時代にあたる住居址や倉庫址といった遺構が斜面一帯から検出されている。この調査区で特筆すべきことは、数多くの手工業生産が行われていたことが遺構や遺物から確認できる点にある。

青銅製品の修繕が行われていたと思われる遺構が検出され、また、木製紡錘車や回転軸といった遺物からは織物が行われていたことが伺われる。さらに、鎌刃を中心とする石器やフリントの石核、焼成前につぶれてしまった土器の塊など、日常生活を送るうえで必要なさまざまな道具がこのエリアで製作されていた。装飾品では、巻きつけ技法によるガラス製ビーズ製作が行われており、花形ビーズ製作用の土製鋳型やタカラガイビーズの未製品なども出土している。

素材も種類もさまざまな製品が製作されていたが、なかでも特筆されるのが皮革工房址である。石灰や塩を使って「皮」から獣毛を削ぎ取り、植物タンニンで鞣して「革」とする工程が行われ、さらに「革」からサンダルやクツなどの製品が製作されていた。製品だけでなく、製品のパーツを切り取った後の裁断片や縫合に用いる糸、革に着色するための顔料も出土している。

壁画やレリーフに描かれた古代エジプト人のほとんどは裸足であり、履物は儀礼的な意味合いを持った、富裕層の所持品と考えられてきた。しかし、アコリス遺跡では数十足の履物が出土しており、それらのなかには明らかに子供用と思われるもの、また破損した箇所を修繕して使用しているものなど、庶民の日常生活においても使用されていたことを伺わせる状況である。皮から革へと加工する鞣し工房であると同時に、製品製作工房という性格を持っており、

世界的にみても皮革工場の検出は非常に珍しいものである。

## 10. エジプト、アブ・シール南遺跡の調査

早稲田大学エジプト学研究所（所長・近藤二郎）

紀元前 3000 年頃にナイル川流域は一人の王のもとで南北が統一され、メンフィスに王都が置かれた。アブ・シール南遺跡は、都メンフィスに付属する巨大な墓域であるサッカラ遺跡の北西端に位置している。この遺跡は、サッカラの階段ピラミッドを起点としてセラペウムと結んだ線を内陸の砂漠側にほぼ 2 倍延長した場所にあり、周囲の砂漠よりも約 30 メートル小高く聳える顕著な丘陵であった。1980 年代まで、この丘陵は高射砲などの軍事施設が存在していたため、一般の立ち入りが制限されていたため、考古学調査もそれまでほとんどなされていなかった。

早稲田大学の調査隊は、1991 年 12 月に、この丘陵頂部で発掘調査を開始した。1992 年からは、調査時期を冬季から夏季に移し発掘調査を実施するようになり、毎年、継続的に 2008 年 8 月の第 17 次調査までがおこなわれてきた。調査以前には、遺跡の具体的な様相が不明であったが、長期間にわたる丘陵全体の発掘調査によって、多くの遺構の存在が明らかになっている。アブ・シール南遺跡においてこれまでに検出された遺構は、中期旧石器時代からビザンツ支配時代までの広範な時期にわたり、主要な遺構は王朝時代に形成されていた。

この遺跡における王朝時代最古の遺構は、初期王朝時代末から古王国時代初期にかけて、ナイル川方向に面した丘陵東側斜面に造営されたシャフトと巨大な石積み遺構である。その後、中王国時代になると丘陵東側斜面に岩窟遺構が造営され、おびただしい数の土器が持ち込まれた。新王国時代になると丘陵頂部で最も活発な活動が行われている。新王国第 18 王朝のアメンヘテプ 2 世とトトメス 4 世の時期に、大型で矩形の日乾煉瓦造の建物が建造され、さらに第 19 王朝 3 代目のラメセス 2 世の第 4 王子カエムワセトによって、石灰岩製の大型石造建造物を築いた。また末期王朝時代以降にもプトレマイオス朝、ビザンツ時代に至る遺物が検出されており、多くの人々がこの地を訪れ、活動していたことが知られる。本ポスター発表において、これまでアブ・シール南遺跡で行われてきた調査概要を紹介したい。

## 11. エジプト、ダハシュール北遺跡の調査

早稲田大学エジプト学研究所（所長・近藤二郎）

早稲田大学のダハシュール北遺跡の調査は、人工衛星の画像処理技術との共同作業によって開始された。人工衛星によって撮影されたナイル川流域の画像を処理・検討することで、複数の候補地を絞り込み、それらの候補地を予備調査することで最終的に調査地域を決定したのである。1994 年から 1995 年にかけて予備調査を実施した結果、ダハシュール北遺跡において新王国時代の大型のトゥーム・チャペルを発見したことにより、本格的な発掘調査が 1996 年度から開始された。その結果、2008 年 7 月までに第 15 次にわたる調査がこれまで実施されてきた。

ダハシュール北遺跡は、古王国第 4 王朝のスネフェル王の 2 基の大型ピラミッド（屈折ピラミッドと赤ピラミッド）や中王国第 12 王朝時代のセンウセルト 3 世やアメンエムハト 3 世のピラミッド、さらには第 13 王朝のケンジェル王などのピラミッド群に取り囲まれた位置に存在している。しかしながら、早稲田大学の発掘調査によって、新王国第 18 王朝のアマルナ時代の直前の第 18 王朝のアメンヘテプ 3 世時代から、アマルナ時代後の所謂「ポスト・アマルナ時代」や第 19 王朝時代のトゥーム・チャペル（神殿型墓）が検出され、新王国時代の広大な墓域の存在が明らかとなった。このことは非常に重要であり、特にアマルナ時代やポスト・アマルナ時代の墓の存在は、古代エジプト史の北のメンフィスを中心とする所謂「メンフィス・ネクロポリス」の規模や性格を再検討する貴重な発見となっている。

さらに 2005 年 1 月に未盗掘の完全な形で発見されたセヌウの埋葬の発見によって、ダハシュール北遺跡が、新王国時代の墓域に先行する中王国時代においても盛んな埋葬があったことが明らかとなっている。セヌウのミイラを納めた黄色く塗彩された木棺やミイラの頭部を覆っていたカルトナージュ製の青色のミイラ・マスクは、2006 年 7 月から 2008 年 9 月まで、日本全国で開催された早大エジプト発掘 40 年展において展示・公開された。また、2007 年 1 月にはセヌウのシャフト墓の東隣のシャフト 65 からは、中王国時代の美しい 2 基の彩色木棺をとまなうセベクハトとその妻とみられるセネイトエスの埋葬も発見されており、他の中王国時代のシャフト墓とあわせダハシュール北

遺跡における中王国時代の墓域の性格を明らかにできる材料となっている。

## 12. ルクソール西岸岩窟墓第 47 号墓の再調査

早稲田大学エジプト学研究所（所長・近藤二郎）

早稲田大学エジプト学研究所は、2007年12月から2008年1月にかけて、テーベ西岸のネクロポリス・テーベのアル＝コーカ地区において、新王国第18王朝アメンヘテプ3世時代の高官ウセルハトの岩窟墓（テーベ岩窟墓第47号墓）を中心とする岩窟墓の調査を開始した。このウセルハト墓（第47号墓）は、100年以上も前の20世紀初頭に発掘調査が実施されたが、この発掘は、当時の土地の有力者のおこなわれたものであったため、報告書はもちろんのこと、墓のプランさえも不明であり、その後、この墓には長らくアクセスできない状態が続いている大型の岩窟墓である。このウセルハト墓に関しては、ハワード・カーターが写真として報告した墓内部の王妃ティイのレリーフ装飾が、早くも1905年にパリのオークションで販売されるという事態が起きている。現在、ベルギーのブリュッセルにあるこの王妃ティイの見事な水準のレリーフ装飾は、そのモチーフやレリーフ技術からみて、新王国第18王朝のアメンヘテプ3世治世末期におけるレリーフ装飾をもつケルエフ墓（テーベ岩窟墓第192号墓）やアメンエムハト墓（テーベ岩窟墓第48号墓）、ラモーゼ墓（テーベ岩窟墓第55号墓）などとともに、この時期における重要な岩窟墓のひとつと位置付けられる。

2007年12月に開始された第1次調査では、ウセルハト墓（第47号墓）とその周辺部における地形測量および堆積砂礫の除去作業を実施した。その結果、調査対象地域には、第47号墓のほか、テーベ岩窟墓第174号墓、第62号墓、第264号墓、第330号墓の計5基の新王国時代の岩窟墓が存在しており、それぞれの岩窟墓の平面プランの略測をおこなうとともに、第62号墓と第264号墓の2基の入口に鉄扉を設置するなど遺跡調査地区の整備も実施した。

第1次調査では、ウセルハト墓を覆う砂礫の除去を行い、墓の前庭部の検出に成功することができた。これまでウセルハト墓（第47号墓）の平面プランの予想として南北に軸線を有する岩窟墓であるとの見解が有力であったが、今回、墓の前庭部のプランを確定することによって、この岩窟墓の軸線が東西方向であると推定されている。2009年12月に実施される第2次調査によって、さらに貴重な資料が発見されることが期待される。

## 13. 王家の谷・西谷、アメンヘテプ3世墓の調査と修復

早稲田大学エジプト学研究所（所長・近藤二郎）

早稲田大学のエジプト調査は、ルクソール市の対岸、テーベ西岸の南にあるマルカタ南遺跡で、1971年冬から開始された。そして1974年1月、このマルカタ南遺跡の第3次調査中に「魚の丘」の彩色階段の大発見があった。早稲田大学の発掘調査地の北には新王国第18王朝のアメンヘテプ3世のマルカタ王宮址が存在していた。魚の丘で発見された日乾煉瓦造の建物址は、その後の調査でアメンヘテプ3世にかかわるものであることが判明し、その後の早稲田大学の調査は、マルカタ王宮址の再調査やクルナ村にある新王国時代の岩窟墓調査など、新王国第18王朝時代へと調査の方向を大きく変えていったのである。

1989年から、早稲田大学は、王家の谷・西谷にある新王国第18王朝のアメンヘテプ3世墓（王家の谷・第22号墓）の調査を開始することになった。アメンヘテプ3世墓は、18世紀末にフランスのナポレオンのエジプト遠征に同行したフランス人の技師により再発見されたものである。その後、シャンポリオンやレブシウスをはじめとする数多くのエジプト学者がこの墓を訪れ調査を実施したが、私たちが調査を始めるまでは、アメンヘテプ3世墓に関する一冊の学術報告も存在していなかった。

まず、私たちは王家の谷・西谷の詳細な地図の作成から始めた。アメンヘテプ3世墓内部や周辺部のクリーニングを繰り返し実施し、王墓の正確な平面プランや断面図を作成するとともに、数多くの遺物を検出することができた。アメンヘテプ3世墓の再調査は、この時期の王墓のありかたを考える非常に重要な材料を提供することができた。

アメンヘテプ3世墓の再調査とともに私たちの関心は、王墓内部の彩色壁画の保存と修復にあった。さまざまな試行錯誤を重ねながら、墓内の壁画の応急的修復・保存作業を実施した。2000年12月になってユネスコ・日本信託基

金が採択され、予備調査を経て2003年1月から5月にかけて第1期の本格的修復作業を実施し、2003年12月から2004年3月にかけて第2期の修復作業を行うことができた。この2基にわたる修復作業では不十分であり、2008年秋から再び本格的な修復作業を実施することになる。

#### 14. クフ王の第2の船プロジェクト 早稲田大学エジプト学研究所（所長・近藤二郎）

エジプトの首都カイロ市の南西郊外に位置するギザ台地には、古王国第4王朝のクフ王、カフラー王、メンカウラー王の3基のピラミッドであるギザの3大ピラミッドが存在している。この中で、最も北東に位置するクフ王の大ピラミッドの南側にある蓋石で密封された2基の船坑の内部に2隻の木造大型船が分解されて納められている。

1954年にエジプト考古庁のインスペクターであったカマル・アル＝マッラーフが、偶然にこれらの船坑を発見し、東側のひとつを開封したのであった。そして、考古庁の技師であったアフマド・ユーセフ・ムスタファが出土したレバノンスギ製の部材約650点を組立てた結果、長さ43メートルにもおよぶ世界最古の大型木造構造船である「クフ王の第1の船」の姿を復元したのであった。この第1の船は、船が分解されて納められていた船坑の上に建てられた博物館内部に展示されている。

一方、第1の船坑の西側には、蓋石で密封されたままの第2の船が納められている船坑が存在している。早稲田大学では、1987年に独自に開発した電磁波地中レーダーを使用して、未開封の第2の船の船坑を探查した。

1992年から本格的な調査を開始し、これまでに以下にあげる調査を実施し成果をあげてきた。

##### ① 船坑の調査

船坑とその上に残るピラミッドの外周壁を実測調査。また、岩盤の亀裂の状態や、クフ王のピラミッドに付属する複数の他の船坑を調査した。

##### ② 保存処理に関する調査

クフ王の第2の船の船坑内部から採取した第2の船の部材のサンプルの樹種、成分、年代などを科学的に分析。そして、そのデータをもとにして部材の保存処理方法の検討をおこなった。

##### ③ クフ王の第1の船の組立を行った、元エジプト考古庁技師であったアフマド氏へのインタビューをもとに、「第1の船」で組立復原シュミレーションを実施した。また類例研究として、デンマークのヴァイキング船復原事例を調査、さらに、カイロ、エジプト博物館所蔵のダハシュール船の実測調査を実施し古代エジプトにおける造船技術の分析をおこなった。

これらの成果をもとに、2008年－2009年から本格的なクフ王の第2の船の部材の引き上げ作業を開始する予定で準備を進めている。